「創」6月号

元「連合赤軍」メンバー獄中手記⑧

実兄との劇的な面会、そして私の辛い自己省察

白内障で入院したこの春、信じられない出来事があった。
唯一の家族である実兄との面会だった。17名を殺害したとして
無期懲役で服役中の筆者が、17名殺害の自己省察を続ける獄中手記！

吉野雅邦

●はじめに……編集部

長期にわたるうえに時々休載することもあって、初めて読む方にはわかりにくいと思うので、改めて簡単に解説しよう。

今回が第8回となるこの手記は、17名を殺害したとして無期懲役で服役中の元連合赤軍メンバーによるものだ。前号で休載したのは、白内障手術のため50日間入院していたためだ。市民社会なら日帰りも可能な手術だが、無期懲役囚の場合、移送や受け入れ態勢など簡単ではない。

手紙のやりとりは通常はできるが、この期間は、送った『創』に「該当者不在」という断り書きがついて刑務所から返送された。

手紙のやりとりが比較的自由になったのも、事件から50年を経た一昨年頃からで、面会はいまだにできない。吉野さん自身、既に76歳で、何年か前に大病を患っており、この手記は可能なうちに事件についての自己省察を行い、世に問いたいという筆者の思いによるものだ。

1972年にあさま山荘に立てこもった時に、現場で投降を呼びかけた母親も既に他界しているが、最近の大きな出来事は唯一の家族である兄との面会だった。事件後の家族との関係についても連載手記で断片的に触れてきたが、兄との劇的再会を今回の手記で報告している。

連合赤軍事件は歴史に残る悲惨な出来事だったが、この手記は、その当事者がまとまった形で初めて社会に発表した貴重な記録だ。

白内障手術入院中の信じられない出来事

実はこの2月1日から50日間ばかり、白内障手術のため、東日本成人矯正医療センターに入院していました。お陰様で、0・4しかなかった視力（矯正）が1・0まで改善し、作業や執筆をするうえで大変助かっています。1年余り待った甲斐があり、関係者の方々にとても感謝しております。

また、その入院中に、信じられないような幸せな出来事がありました。近隣の高齢者施設に入所中の兄との面会がかなったのです。しかも、過去2回のテレビ電話ではほとんど反応がなかった兄が、私の顔を見るなり満面の笑顔で口をモグモグさせ語りかけようとしてきたのです。付き添ってくださった介護長さんと看護師さんが、「こんな笑顔見たことない」と驚嘆され、拍手までしてくださったほどでした。

金子みちよさんと筆者（1968年頃撮影）

アクリル板にへばり付いてしまった私は、何度もマイクにぶつかり、係官の方が調整してくださったりで、とても親切にしていただきました。

逮捕直後に、生き残ってしまったことを悔い、生き続けることの是非を自問した際、思い起こしたのが、兄の前の障害者施設の教会堂でともに礼拝した時の、荘厳にして平安なひと時のことでした。

私を殊の外慕い続けてくれてきたその兄のためになら、生きることも許されるのかもしれない、との思いで心の中で口ずさんだのが賛美歌「主われを愛す」で、これを面会で歌わせてもらったりしました。

最後に兄に向けて、「今度は僕の方で兄さんの方に会いに行けるよう頑張るからね」と思いを伝えたのですが、他方で、直接会えるのはこれが最後になってしまうのかもしれないとの悲観的な感情も湧いて、面会後涙があふれ、しばらく席を立てない状態でした。

ただ、今思うのは、この2月に13回忌を迎えた父（享年95歳）、そして今夏に没後4年となる母（享年99歳）の慰霊のためにも、また何よりみちよをはじめとする17名の方々の慰霊、追弔のためにも、決して弱気になってはならず、生ある限り、科された務めを果しつつ、仮出獄の日もまためざすべし、そう自らに言い聞かせています（面会実現のため、大変な御尽力をいただいた古畑恒雄弁護士先生や山崎社会福祉士さんへの御恩返しとしても、そうせねばと心しています）。

この入院もあって執筆がはかどらず、またまた休載となり、多くの方々に御迷惑や御心配をおかけし、大変申し訳なく思っています。さらに書きつなぐに当たり、その前に4月号の2カ所について訂正させていただきたく思います。

まず1点目は、最後の方で「拘禁刑」

について言及させてもらった部分についてです。

「懲役刑」と「禁固刑」とを統合した「拘禁刑」は、来年6月に施行されることが既に閣議決定されている、とのご指摘を、身元引受人にまでなってくださり全面的に私を支えてくださっています古畑弁護士からいただきました。感謝の思いを込め、謹んで訂正させていただきます。

次に107ページの中段後半で、「これの罪に向き合い」は、「己れの罪」、また、「遺族への謝罪や懇謝」は、「〜慰謝」の、いずれも誤植につき、これもお詫びの上、訂正させていただきます。

さて、前々号の続きです。

先の命の問題とも密接に関連しますが、人の自然感情、特に性愛についての捉え方についてです。

私が陥った大きな過ちの一つが、人が人であるが故に生ずる感情（喜怒哀楽や平和、友愛、幸福への願望など）や、本能ともいえる欲求の根幹であり、命を生む原動力となっている性愛感情を、個人的（利己的）なものとして蔑視していた点です。

それが象徴的に表れたのが、11番目の被害者となさしめた内妻、金子みちよに対する最終盤での私の冷淡極まりない態度であり行動です。

それを直視することは、私にとって誠に辛いことですし、また、その実情を再現する文章を、読むに堪えないと思われる方も多いはずです。しかし、彼女を愛そうとして、愛し得なかった者の、生涯を賭けた務めでもありますし、何よりみちよ自身がそれを望んでいるように思えてなりません。

しかもこの点は、私の省察内容の核心ですし、事件全般の本質を如実に示しているとも思えますので、以下、詳述させていただきます。

10番目の被害者 大槻節子さんの顔は…

みちよ（夫婦関係を保てず、その愛に応え得ず、むごたらしくもその命を奪った者としては、「さん」付けで呼ぶべきか、とも思いますが、他ならぬ彼女が、〝今さら他人行儀で気取らないでよ、私はあなたの妻として殺されたのだから、そういう立場で責任をとってちょうだい〟と、泉下から強く訴えているように思えるので、心からの謝罪と追弔の思い、そして深い親愛の情を込めて、こう呼ばせていただきます）。彼女が、榛名ベースで殴られ縛られて、迦葉山（群馬県沼田市郊外）に運ばれてきたのは、1972年（昭和47年）1月29日の朝のことでした。ここに新しい小屋を建設するために、他の10人のメンバーとともに派遣されてから、ちょうど1週間が経っていました（この時までに既に8人の方の命を奪っていたのです）。翌30日の夜に10番目の被害者として命を奪った大槻節子さんも同様の状態で、一緒に運ばれてきたのです。

近付く足音に気付き、「タンク岩」前のテントから飛び出したところに、彼女が手製担架に乗せられ、運び上げられてきました。その顔を見て、一瞬息をのみ、胸が潰れる思いでした。両頬が赤黒く腫れ上がっており、目も十分開けられず、別人のようだったからです。

榛名で、彼女を殴って縛ったことは、伝令のような形で往復していた坂口からあらかじめ聞かされていました。

彼女は、10日程前に会計係を降ろされ、その後、断続的に「総括」（自己批判）を求められており、迦葉ベース建設隊からも、問題分子として大槻さんともども外されていたため、迦葉への出発時点でそれは半ば覚悟していたことでした。

そして、その2日前には、彼女と直接の対決をさせられており、私は、苦し紛れに「離婚」を表明していたのです。正面に座った彼女は、「どうしたらいいの」と問いたげな様子で、私の目を食い入るように見つめ、助言を求めていたのですが、私には語り得る言葉がありませんでした。

森は、中国革命の話などを引き合いに様々な弁舌を駆使していましたが、私の心に突き刺さったのは、次の一言のみでした。

「だったら、余計に殴らなあかんやったやないか」

これは、最初に加藤能敬氏への〝指導としての〟殴打方針が決められ、私がその行使役に名乗り出たものの、森に後れをとってしまったうえに、途中で殴ることをやめてしまったことを批判された時のことでした。

理由を問われ、私は、「自分にも彼と同じ問題があると思ったら殴れなくなった」と吐露したのですが、それに対する森の指摘でした。私は、それで、〝そうか、この暴力的指導は、自分には対象者と共通の弱さや誤りがない、それと訣別していることを示すために行わねばならないのだ〟と〝悟った〟のです（今思えば、それは本末転倒で、いわば〝踏み絵〟を踏むことに他ならなかったのですが……）。

結局、のちの〝総括要求〟で、〝総括姿勢あり〟と評価されたのは、対象者への暴力行使をためらわずにやり抜けたことへのものでした。

私について言えば、進藤隆三郎氏を事実上撲殺（肝臓破裂による失血死）した

5月7日発売!!
紙の爆弾
2024年6月号
タブーなしで世相を斬る愚直なスキャンダル誌です。
能天気な岸田訪米の裏で進む
米国のアジア収奪戦略
竹田恒泰教科書を文科省が「合格」
公明・創価「戦闘機輸出」貢献
遺伝子組換え食品これだけの危険
小林製薬「紅麹問題」で少なくとも言えること
リニア中央新幹線「電磁波と白血病」
TSMCが熊本の水を殺す
半導体PFAS汚染
定価700円（本体636円）
鹿砦社 URL http://www.rokusaisha.com E-mail nakagawa@rokusaisha.com
Tel.03-3238-7530 Fax.03-6231-5566

際に、森から、「やっとすっきりしたみたいだな」と褒められたことですし、また、加藤能敬氏も緊縛された者として唯一、二度にわたってその姿勢を認められました。一度は、床下に縛られていた彼が、自分で頭を柱に叩きつけた時で、訳を問うた森に対して、「総括に集中したいためです」と答えたこと。そしてもう一度は、最初の死亡者となった尾崎充男氏への、「格闘」という形をとった暴行に際して、「頑張れ」と声援を送り、この「総括要求」に自主的に参加した態度を示したことでした。

詰まるところ、私を含めほとんどすべてのメンバーは、何が「総括」の判定基準か判らないまま、目の前に突きつけられた暴力的総括要求の任務遂行に、積極的に携わることが自分に科された総括深化のための務め、とでもいう意識で行動して、自らが対象者となることを辛うじて回避し得ていたのではないか、と思えるのです。

そんな状態だったため、私が彼女に言い得たのは、〝頭で考えたって駄目なんだ〟〝わかろうとしてもダメなんだ〟ということだけで、彼女は目を白黒させるのみでした。そして、結局最後には、「よし、こちらから離婚してやる」と宣言して、身を遠ざけたのです。

今思うと、あの時、私が彼女を殴るか、あるいは遠山さんのように自分自身を殴るように指示することが、当時の論理に沿った非情なる〝戦士〟たろうとする者のとるべき態度だったのだろうと思えます。しかし私はそれをなし得ず、ただそれ以上の対決を回避したのです。

この離婚宣告は、理論としては、彼女もまた私自身も、自立した者として、自らに科された〝総括〟の深化を図り、〝革命戦士化〟するため、ということになるのですが、本音の感情としては、彼女に連座して責任を問われることを回避したいという、卑劣な逃避願望が潜んでいたことを認めざるを得ません。

実際に、迦葉に向う道中、沼田市のバスターミナルで自分一人で荷物番に当たった際、〝今なら逃げられるんだ〟との思いが突然湧き起こりました。しかし、すぐに、〝彼女を一人残して逃げるわけにはいかないじゃないか……この銃入りのリュックを放置するわけにもいかない……そもそもそんな気持ちになってしまうこと自体が、革命戦士たろうとする者には許されない……〟と思い直して、自戒したのです。

永田と森が殴打に使った針金の道具の目的は…

坂口から、彼女への殴打や緊縛について知らされたものの、お腹の子どもに影響がないよう、針金で輪を作ったもので殴ったり、また簞笥に寄りかからせたりしている、ということだったので、さほどひどい扱いはされていない、との安堵感もまたありました。

しかし逮捕後わかったのは、それらは事実ではなく、実際には柱に縛り付けており、また針金の道具は、永田が自分の力が弱く、みちよに馬鹿にされないように、森に頼んで作ってもらったようです。ただ、森もそれを使用していることも考えると、この道具は、殴る者の手へのダメージを防ぐためのものでもあった、と思われます。

森は、最初の加藤能敬氏への殴打で、既に手の甲を2倍くらいにまで腫れ上がらせていました。そのため、腹部を殴ったり殴らせたりしており（進藤氏に対して）、自分で自分の顔を殴らせたりして（遠山さんに対して）、自分の手への影響を回避しようとしています。その延長上で、彼もこの器具を使用したのではないか、と思えるのです。

私が絶句して、彼女の顔を見つめているところに、坂東が駆けつけて来て、私を押しのけるようにして、「三木さんは彼女に近付かないように」と指示してきました。これは、あとで森からも厳命を受けました。私が彼女への情に流されて甘い対応をしたり、動揺して救助の手を差し延べたりすることへの警戒心があったのではないか、と思えます。

ところで、間もなくテントにやって来た森に、私がまず尋ねたのは、下の方で警察の動きなど異状がなかったかどうか、ということでした。というのは、前日の午後に、通りがかった猟師に、トタン板などを運搬していたメンバーが目撃されてしまっていたのです。

当時、丹沢のベース跡（3カ月前まで使用）が警察に発見されて、山狩りが始まっている、とのニュースが報じられていました。そのため、猟師が不審に感じて警察に通報することは大いにあり得る、と私には思えたためです。

そこで、全メンバーに諮って、警察が捜索にやってくることを想定し、銃を使っての「殲滅戦」を行うべく準備しよう、と持ちかけたのですが、決断を下しかねて、メンバーらの多くが居眠りを始めた中で、森ら一隊の来訪を迎えたのです。

私が、そうした状況の説明を始めると、話の腰を折る形で、森は、「極左だ」と怒り始め、「そんな馬鹿なことを考えるのは、並木（金子）の総括ができていないからだ」と決めつけられ厳しく批判されました。

それでも、自分の判断がそれほど誤っていたと思えず、不満も抱いたのですが、一応、「総括を深めます」と返答しました。この時、森から「並木には近付くな」との指示を受けたのです。

森は、合同訓練（71年12月上旬）に訪れた私たち革命左派メンバーに対してまず、裏山に向けて作った避難路を誇示、紹介しており、警察に急襲されれば、逃げることも考えていたようです。

また榛名への来訪時にまず口にしたのが、「山が浅いけど大丈夫なのか」でした。そして、東京からメンバーが戻るたびに、偵察メンバーを派遣して、尾行の有無を確認していました。

のちの「自己批判書」の中で、私を人

吉野雅邦さんの自筆の手記

民裁判にかけることに言及していることを考えると、この時の私の〝計画〟が、猟師を捕捉して、〝殲滅〟しようとしていた、と思い違いをしての私への非難だったように思えるのです。彼にとって警察に遭遇した際に、〝殲滅戦〟を闘うことは想定外のことだったのでしょう。

植垣康弘氏に密かな連帯感

その日の夕方になって、迦葉山のほうで殴り縛った山本順一氏（9番目の被害者）を加えた3名を、600メートルほど登った、完成間近の小屋に運び上げることになりました。

まず、みちよを乗せた担架を、植垣氏ともう1人（坂東か）が前後を持って、タンク岩前の幅4メートルほどの小川を越えることになりました。川には、自然の石が渡れるように点々とあるのみでしたから、不安が募りました。

もし、足を踏み外して、担架を落としてしまえば彼女はずぶ濡れとなる。それまでの例からすると、延命措置としての着換えなどはまず期待できない、死に直結しかねない……。

2人がなんとか無事に渡河してくれたので、本当にほっとしました。心の中で掌を合わせました。

次に、私ともう1人とで、山本氏を無事に渡らせました。

そして最後に大槻さんの番です。なぜか彼女は、女性陣だけで運ぶことになっていました（彼女は男性に媚びを売る、というような批判を受けていたための措置だったかもしれません）。担架がかなり重いので、女性2人だけでは無理で、4人が四隅を持って、川へと進みました。

飛び石は、横並びにはなっていませんから、それで渡るのはとても無理です。先頭の杉脇さんもそれを察知したのか、いきなり川の中に片脚を踏み入れました。石をつたうのを諦めたようでした。

とても見ていられず、対岸の私は、「待った！」と大声で制止しました。そして、すぐに彼女らの所に赴きました。一旦下に降ろした大槻さんに近寄り、「体重どのくらいかなあ」と一人言を口にしつつ、彼女の身体を起こして、二つ折りの形で肩に担いでみました。

彼女は、体操の選手だったようで、とても筋肉質でしたが、かなり小柄でした。思ったより軽く、これなら一人で担いで渡れそうな気がしました。

意を決して渡ると、無事成功し、安堵しました。気付くと、対岸の植垣氏がこちらをじっと見つめているのが目に入りました。目が合うと、満面の笑顔で、「さすがあ」と嬉しそうに声をかけてきました。

氏は大槻さんとの結婚を望んでおり、恋人関係にありました。そのため、私がみちよについて抱いた不安や懸念を同様に抱いていたことがわかり、秘かな連帯感を抱きました（のちの妙義での買い出しや、妙義越え後の若草山でのカマクラ作りなどで、〝共闘〟することになりました）。

ところが、まずいことが起きました。

運び終えた大槻さんを地面に降ろす際に、下にあった小さな岩に気付かずに後頭部をぶつけてしまいました。思わず、「ごめん」と謝って、ぶつけたあたりの頭髪をかき分けて、「大丈夫かな」と呟きつつ傷の状態を確認しようとしました。

と、そこに杉脇さんが「ありがとう」と口にしつつ駆け付け、私の横にしゃがみ込むと心配そうにこう言ったのです。

「さっき下の方の川を渡るときに、岩に彼女の頭をぶつけてしまったの、大丈夫かしら」

それを耳にして思いました。〝いかん、優しくしちゃだめなんだ〟。自分が、封じ込めていた杉脇さんの優しさを揺り起こしてしまったことに気付いて慌てたのです。

妻子を呼ぶかのように大声を発して事切れた

ちなみに、杉脇さんは、大槻さんと同じ横浜国大教育学部の同級生で、いつも一緒にいた大の仲良しでした。年齢は、私やみちよと同じでしたが、2人ともストレートで入学していたので、学年は1年先輩でした。

また、私が組織（革命左派の下部青年組織の青年共産同盟）入りする直前の学習会（横浜・白楽での）の余暇時間に、3人で「フランシーヌの場合は」などの歌を合唱した間柄だったです。

私は、「大丈夫、大丈夫」と彼女をいなしながら、傷の見分を適当に終わらせ、受け持ちの山本氏の所に戻り、列をなして小屋に向かいました。

3人とも小屋の床下の柱に、立ったまま縛り付けました。その日の夜から翌日の未明にかけて、山本順一氏（28歳）が亡くなりました。氏は最も厳しく、C・C（中央委員）を批判した人でした。かつて日中友好商社に勤務していた関係で、中京安保共闘とつながりができたようです。中国での山岳根拠地が念頭にあったのか、生後2カ月ほどの娘と細君とを帯同して、榛名ベースに入って来ました。頭を丸刈りにしており、生活のすべてを投げ捨てる気概がうかがえましたが、入ってすぐに彼が目にしたのは、顔見知りの加藤能敬氏が殴打、緊縛される凄惨な状況でした。

主に運転技術を買われての入山でしたが、その運転ミスが相次ぎ、革命運動への姿勢や精神の問題と批判されても、あくまで運転技術の問題と言い張りました。

そして、それまでの〝総括要求〟への関わり方を問われると、「言われた通り手伝ってきました。これからも言われればやります」と、没主体的な返答でした。しかし、更に詰問されると、「C・Cの方が論理矛盾を犯している」と、意を決したように逆批判したのです。

今考えれば、「革命戦士に育成すべく指導する」と言いつつ、苛烈な暴行の末に本人を死に至らせる連続だったわけで、甚しい矛盾は明らかです。それを単刀直入に指摘したわけで、社会経験が最も豊富で客観的な眼を持っていたが故に、〝王様は裸だ〟と喝破し得たのだと思います。

そんな彼を、「総括(自己批判)」姿勢なし、と断じて、殴打、緊縛して、厳寒下に放置し、命を奪ったのです。話によれば、彼は、「俺は気が狂った」と呟いたり、舌を噛もうとした末に、妻子を呼ぶかのように雄叫びに似た大声を発して、事切

れたとのことで、悲愁極まりない死だったと思え、謝罪の言葉も見出せません。

「なんで縛られなきゃいけないの」

そして、その深夜に、大槻節子さん（23歳）も亡くなるのですが、その数時間前のことでした。

みちよを縛ったロープが緩んで、崩折れているとの報告が、C・Cにもたらされました。縛り直しに行くことになったのですが、坂口と、何と私が指名されたのです。

なぜ、それまでの方針が一転したのか怪訝に思いながら、緊張して床下に赴きました。

坂口が上半身を、私が下半身を受け持ちました。膝の上を柱に縛り付けようとすると、彼女が、「膝の下を縛って」というので、その通りにしました。その方が、ロープがずれなくてよいのだ、と推察できました。

また、余りにきつくしても痛いのでは、と少し加減すると、「きつく」とまた注文され、そうしました。

一方、坂口の方は、身体が落ちないように、両脇の下にロープを通し吊り上げるようにしたため、彼女は「痛い痛い」と悲鳴をあげ抗議していました（のちに「あさま山荘」に押し入った直後に、人質としたY子さんを彼が二段ベッドの梯子に縛り付けた際に、全く同じようにしたためY子さんがやはり痛みを訴えたことがありました。私は見かねて、思わず、「縛らなくてもいいじゃないか」と進言したのですが、彼に「バリケード作りはまだ終わってないんだろ」と睨み返されたため、引き下がってしまいました。情けない限りです。思えば、彼にとってのバリケードは、対警察用というより、彼女の逃走防止用だったことに気付きます）。

私が手間取っている間に、坂口は終わったようで、何も言わずにさっさと小屋に戻ってしまいました。慌てました。すぐ脇に、縛られた大槻さんがいるものの、彼女と2人だけで向き合うことになったためです。

すると彼女が、小さな声でこう問うて来ました。

「なんで縛られなきゃいけないの」

私は、すぐに返答できませんでした。というのも、緊縛について、きちんとC・C内で位置付けしたことがなかったためです。

緊縛は、そのひと月程前に、加藤能敬氏への最初の殴打を行った直後に、初めてなされたのですが、それはきちんとした事前の協議がされないまま、なし崩しに行なわれたことだったのです。

革命歌を高唱したり、恋人の小嶋和子さんと接吻するなど、反省姿勢が全く見られない加藤氏を殴って気絶させることで、新鮮な気持ちに至らせ、いわば覚醒を促すための〝指導〟との位置付けがなされて、殴打が開始されました。

〝指導部の闘い〟として設定されたこの殴打でしたが、途中で永田が独断で下部メンバーにも参加を強要し、特に、彼の2人の弟まで加わらせたのです。その過程で、この殴打が本人の総括（反省）への援助、との意味付けも付与されました。

しかし、能敬氏の頑張りもあって、目的の〝気絶〟を達成し得ないまま、全員に殴らせ終えた時点で、永田が、彼の腕を引き立てて私と坂口の所にやって来ると、「縛っておいて」と指示してきました。

打ち合わせで、〝縛る〟話は全くなされていないため、私が、「何で？」とためらいつつ尋ねると、彼女は、真後ろに立っていた森の方をさっと振り返ると、「逃げるからでしょ」と、同意を求めるように問い掛けたのです。

虚を衝かれた感じの森は、面食らいながらも、やや間を置いて、「あ、ああ」と曖昧な返答を口にしました。とっさの同意でした。

すると永田が、私の方に向き直りながら、「ホラ、さあ」と、促してきたのです。指導者2人の合意による決定であれば従う以外ないか、との思いで、坂口と2人で能敬氏を柱に縛り付けてしまいました。

緊縛が12名のうち9名の凍死をもたらした

以降、この緊縛が総括を厳しく求めた者に対する最終的な措置として、常套手段と化していきました。そして、暴行の末緊縛した者の解縛はなされず、12名中9名の凍死をもたらせ、命を奪うに至ったのです。

思うに暴行も緊縛も本人の〝革命戦士化〟を促す育成手段でなく、指導部への服従を強要するもので、制裁手段に他ならなかった、と今気付きます。

突き詰めれば、この暴力は、指導者を内外の脅威から防衛する保身的なもので、私は、その先兵として挺身しまったのだと思え、忸怩たる思いです。

そんな経緯があったため、みちよの問いに対して、私はすっきりとした返事ができなかったのですが、少し考えて、呟くようにこう言いました。

「逃げるからだろう」

すると彼女は、呆れたと言いたげな表情をたたえ、身体を折るように前傾させながら、「私が逃げるわけ、ないでしょう」と、やはり呟くように口にしました。その言葉には、〝私があなたを置いて一人で逃げるなんてあり得ないことは、あなたが一番知っているはずでしょ〟との訴えが含まれていると思え、私には返す言葉がなく、逃げるようにその場を立ち去ったのです。

小屋への通路脇の柱に縛り付けてあった大槻さんのすぐ傍を通り抜けたのですが、その険しい表情に、私への厳しい非難の感情を読み取って、身が竦んだことをよく記憶しています。

大槻さんは、その数時間後に死亡が確認されました。険しい表情は、死を前にした苦悶を示すものだったのだ、とあとで思いました。

そして、そこから更に数メートル進んだところで、心臓がキュッと縮まるような思いを味わいました。

小屋の土間と、板の間の隙間から、上下逆になった森の顔が、じっとこちらを見据えているのがうかがえたためです。〝そうか、テストされてたんだ……。大丈夫だったかな……〟と自己点検し、何とか動揺を押え込みました。（以下次号）

「創」8月号

元「連合赤軍」メンバー獄中手記(9)

みちよの死に直面し、心の中にポッカリと穴が…

「身体が奈落の底に沈み落ちていく感じがしました。〝ああ、とうとう死んでしまったか〟との思いがこみ上げ、ポッカリと穴があいた気分に捉われました」手記はいよいよ佳境に。

吉野雅邦

●はじめに

この連載手記も残すところわずかになった。連合赤軍事件といっても50年以上前の出来事だからなじみのない読者もいるかもしれない。テレビ中継に日本中が釘付けになったあさま山荘銃撃事件で知られるが、その後、凄惨な同志殺しが発覚し、社会を震撼させた。

その同志を含む17名の殺害という罪で無期懲役に服しているのが吉野雅邦さんだ。事件についての詳細な手記を発表するのはこの連載が初めてだ。高齢で、重篤な病気も経験しており、自らが関わった事件について自らの手で記録を残したいという思いもあるだろう。

この間、手記で書かれているのは、同志を次々と殺害していく凄惨な体験だ。特に妻みちよさんの殺害に関わったことは痛恨の思いで、今回はその経緯だ。

さて6月号掲載の手記について訂正がある。面会はできず、手紙も発信制限があって、十分な確認作業ができていないという事情もあり、今後は入稿から掲載を1号遅らせ、本人確認を経て掲載することにした。6月号の訂正は以下だ。

①6月号P84中段小見出し「10番目の被害者大槻節子さんの顔は…」を「逆び上げられたみちよの顔は…」に訂正します。②P88上段小見出し「植垣康弘」は「植垣康博」の誤植でした。③P90～91に吉野さんと坂口さんが加藤能敬氏を縛ったとの記述で、「坂口」は「坂東」の誤植でした。お詫びし訂正します。(編集部)

大槻節子さんの死去を確認

山本順一氏を絶命させたその日(72・1・30)の深夜、大槻節子さんの死去を確認することとなりました。きっかけは、小用に立った永田からの報告でした。傍を通った際に、柱に縛り付けてあった大槻さんから恨みを込めたような表情で睨みつけられた、というのです。

それを受けて森が「彼女はこれまで殴られていず、それをいいことに総括姿勢を放棄している。厳しく総括を求めるために殴る必要がある」と主張し、C・C(中央委)内での協議の上で、上間付近において全員にそれを告げました。

この時、永田が植垣氏に、「あなたもできるわよね」と促し、森にも念を押されて、植垣氏は緊張しきった表情で、「ハイ」と返事し、肯きました。

そして、植垣氏と私とが先頭に立って、小屋の床下に赴くと、大槻さんは、ガックリと頭を垂れていました。2人で脈を取ったりしましたが、絶命していることが確認できました。植垣氏が、大きく息を吐いたのを記憶しています。

初期には、こうした場合、永田の主唱で人工呼吸をしたり心臓マッサージを施し、また酒を飲ませるなどして蘇生を試みたりしたのですが、この時点では彼女もそうした行動をとりませんでした。私も、それに対して違和感を抱かず、縛られた者の死を受容する意識に陥っていたのです。

小屋に戻ると、森は全員に対して、「彼女は、さっきの我々の会話を聞いていたんだ。それで自分が総括姿勢を持っていないことを見抜かれたと思い、絶望して死を選んだんだ」と述べて、再び精神的敗北死との位置付けをして、暴力的総括要求の正当化に走ったのです。

私もまた、総括しようとしない者は革命戦士として生きる道を放棄した者であり、殲滅戦以前の段階で生きる資格を失った敗者とみなして、その死を当然視したのです(正確に言えば〝総括しようとしていない〟と指導者によって判断された者は、となるのですが)。

大槻さんが殴られなかった理由は推測するしかありませんが、同時並行で総括を求められていた金子みちよと比較すれば、その〝罪状〟が軽かったことや、態度が反抗的でなく素直だとみなされたことが影響していたように思えます。

大槻さんが求められた総括要求

ちなみに、大槻さんが求められていた総括要求の課題は、

(1)(革命左派時代の)指導部に対して、公然メンバーや獄中メンバーとの連帯と団結を求めた「意見書」(岩田氏執筆)に同調したこと

(2)小袖ベースから離脱、逃走し、のちに殺害するに至った向山茂徳氏と、深い関係を結んだとみられること(※)

※彼女には、相思相愛の恋人W氏(上赤塚事件で拘留中)がいたのです。

(3)東京から榛名ベースに帰還する際、シンパからもらったカンパの金を、自分のパンタロン購入や美容院でのパーマ代に充てたこと

(4)(2)の総括をきちんとしないまま、植垣氏からの求婚を受け入れようとしたこと

——などが挙げられます。

森・永田両名は、大槻さんを高く評価していました。というのも、12月初旬の合同訓練時の遠山さん批判の折に、彼女が自己批判をしつつ遠山さんを説得しようとしていたためです。それ故2人は、拳銃の発射訓練者に、将来有望な者として、岩田氏とともに彼女を指名、選出したほどだったのです。

特に森は、彼女を気に入っていたようで、(3)の件を彼女が告白した時には、本当に残念そうに「何で……」と、困惑の表情を浮かべつつ、その非を指摘したりしていました。

もともと大槻さんは、懐の深い包容力に富んだ寛容な人で、私が出会った人物の中で一番といってよいほど、気立てが良い優しさをたたえた女性でした。

人当たりが良く物腰がやわらかかったため誰からも好かれ、特に男性を惹きつける魅力にあふれていました。ただ、人の心を傷つけまいとの思いが働くためか、好意を示されると、それを無下にできず受け入れてしまって、相手の誤解を生んでしまうことも多かったようです。

頭脳も明晰で統率力もあったため、森はおそらく永田の気持ちを忖度して、その足元固めとして、本意に反して、大槻さんへの厳しい対応をとり続けたように、私には思えます。

というのも、死刑に処した寺岡恒一氏も、そして金子みちよも、赤軍派——森に対して共感を抱いており、森個人としては、何ら害を及ぼさない人物であり、この点では大槻さんも全く同様だったからです。

しかし、永田に対しては、不信感や不満を抱き続けており、森はそれを感じ取り、また知って、森・永田体制の安定性保持のためには、こうした危険な要素の除去は不可避と判断したに相違ない、と思えるのです。

俗に、遠山さんや大槻さん、そしてみちよは、美人で頭が良いために、永田の嫉妬心をかき立て、その猜疑心の餌食となったと語られてきたかと思いますが、実際に彼女らの追及を推進、領導したのは森で、その森は、こうした女性陣に対してはむしろ好感を抱いていることを考えると、〝感情〟が行動要因となっていないことは明らかと思えます。

総括要求のための暴力 森と永田の違い

もともと、この総括要求のための暴力は、個人の怒りや恨みなどの制裁感情に起因するものでなく、自分内部の日和見傾向など問題点を払拭、克服するという内面での〝練成〟をめざしたものとして設定されていました。

これは、森自身が、69年7月6日の〝分派闘争〟（内ゲバ）の現場から逃亡してしまったという〝日和見主義〟の克服を課題としていたことに発して、案出されたのです。それ故に彼の暴力行使は、激情に駆られていず、冷静沈着に行われています。

一方、永田には、そういう観念的な面はなく、感情の動きがモロにうかがわれます。ただ、それはマイナス面よりむしろプラスの面で顕著でした。具体的に列挙すれば——

①尾崎充男氏の死去（71・12・31）直後、外の立ち木へと移動させた緊縛中の加藤能敬氏と小嶋和子さんに対して、食事を与えるよう私ら下部メンバーに指示、実行させたこと

②小嶋さんの異常が発見された際、即座に小屋内に入れ、下部メンバーに人工呼吸などを指示し、坂口には、日本酒をお燗するよう指示

③加藤能敬氏の死亡が判明した時、駆け寄って肩を揺すりながら、「何で死んじゃうのよー！」と涙声で叫んだ

④遠山さんの死が判明した際、小嶋さんの時のような対応をしなかったことから坂口が立腹して、永田に向けて、「お前は冷たい」と非難。それに対して、「私だって一生懸命やってるのよ！　謝りなさいよ」と抗弁して坂口に謝らせたのだが、坂口が消沈して、「C・Cを辞める」と吐露。その時永田は、「私だって辞められるのなら、辞めたいわよ！」と憤然として発言。そのやり取りを脇で聞いていた森が、永田に対して小声で、「それを言っちゃあダメなんだよ」と、両手でなだめる仕草をしつつ諫めた。

——そんな事実があり、印象的に記憶しています。

もっともそれを上回るような負の事実も存在します。加藤能敬氏を殴打して気絶させようとした際、独断で全員を呼び集めたこと。また、のちに全員に殴らせ、抵抗する弟2人にも強要したこと。また、能敬氏の女性問題に関する告白を受けて、恋人たる小嶋さんに命じて殴らせたこと……いえ、そもそもこの殴打が能敬氏と小嶋さんの接吻シーンを目撃した永田の怒りによって促された方針であったことも見逃せません。

彼女の感情的対応を挙げればキリがありませんが、「死」という最も重大な局面で見せた先述の事実は、特記に値すると思え、詳述させていただきました。

なお、みちよに関していえば、永田の質問に答えて、「（森の）眼が可愛いと思った」と述べたことが、永田にとっては、みちよが森に好意を抱いて、自分を押しのけて地位を奪いかねない、との危機感を抱いたことがうかがえます。森もそれを感じ取って、みちよについて、「女の矢吹（＝寺岡）」と断ずるに至ったように思えます（みちよの発言を耳にした森は苦笑いして「まるで子ども扱いだな」と軽く呟いたのですが、永田の方は「ホラ、やっぱり……気をつけなきゃダメヨ」と森をたしなめていたため、そう思うのです）。

みちよの縛られた姿を間近に見る苦痛

さて、大槻さんが亡くなった翌日は、山本氏を加えた2人の遺体埋没地の調査に赴き、その夜に埋没。次の日の午後のことでした。

植垣氏らと、裏手のドア付近の未完成部分の補修作業に従事していたところに、坂口が呼びに来ました。

C・C用のコタツのところに赴きますと、森と永田が立ち上がって、私を待ち

構えていました。2人とも硬い表情で、衝撃の方針が森から伝えられました。

「並木（みちよの組織名）は、お腹の子供を楯にとって総括しようとしていない。それを許すわけにはいかない。我々は彼女について、『女の矢吹（10日ほど前に「処刑」した寺岡氏）』だと思っている。そこで、彼女のお腹を切り開いて子供を取り出すことにした。子供は組織の子として育てるが、並木は助けず、そのまま死刑とする……。俺はこの闘いをやり抜く……」

すると、すぐ脇の永田も、「私もやる」とこわ張った表情で言いつつ、2人で私の顔をじっと見据えてきました。その言葉と視線が胸に突き刺さり、息をのみ、言葉がすぐには出ません。それでも、意を決して言いました。

「俺も……やる」

すると2人とも、「おう」と安堵の声を漏らし、表情が緩みました。森は、「よし」と肯きました。

たしかその直後だったと思います。永田が上間の方に向かうと、そこに屯していたメンバーに対して声を掛けました。

「これから並木を上に上げて着換えをさせるから、女の人は手伝ってちょうだい」

それを聞いて私は、この行動のために、私が勘違いをしないよう釘を刺す目的もあって、先の決意を促されたのか、と思いました。

着換えをさせてくれることは、思ってもみないことで、内心嬉しいことでしたが、男性メンバーもいる中での着換えには納得しかねる思いもあって複雑でした。

その着換え後、彼女は小屋内の上間近くの柱に、座った姿勢で縛り付けられるに至ったのですが、脇を通った時に横目で見やると、手の甲の皮がむけて赤い肉がむき出しになっていました。

逮捕後、調書などでそれが榛名で天ぷらを揚げた際に負った火傷のためとわかったのですが、当時は凍傷のためと思い込み、〝ああこれで彼女の手は使いものにならなくなったんだ〟と心を痛めました。もちろん、それがまわりに（特にC・Cに）気付かれてはマズイので、素知らぬ風を装いました。

床下に比べると暖かい小屋内に上げられたことは嬉しいことでしたが、縛られた姿を間近に目にすることは苦痛で、正直辛いものがありました。

森からの指示に緊張

翌々日、2月3日の夜のことになるのですが、森から次のような指示を受け、緊張しました。

「さっき並木の傍を通った時に、声が聞こえたので、〝何か変わったことがあるのか〟と聞いたが、〝いえ、何もありません〟との返事だった。でも、何か隠している感じもしたんだ。これから2組の夜番を決めて、よく注意するように伝えておいてくれ。あと、ミルクも与えておいてくれ」

縛り直しの際のテスト、そして〝開腹処刑〟への決意表明……。それでいわば〝合格〟しての、彼女に関する初めての単独での任務指示だったわけですが、当時は、まだ信任は得られていない思いもあったので意外に思い、ことの外緊張しました。森は指示するとすぐにシュラフに潜り込みました。

私は、土間に向かい、みちよのすぐ脇辺りに立って、皆に声を掛けました。

「誰か今晩の夜番をしてくれないか。2組いるんだ」

すると間髪入れず、みちよが、「ハイハイ、わたしと野呂君がやります」と、はっきりした声で言ったのです（野呂は、加藤兄弟の16歳の末弟です）。

びっくりしました。自分の夜番を募っているのに、その本人が名乗りを上げたのですから、心は千々に乱れました。

〝意識が混濁してしまってるのか……。それとも私に何かを訴えたいのか……〟

動揺を鎮めようと、また取りつくろうために、彼女に対してわざと乱暴な口調で叱りつけました。

「うるさい、お前は黙ってろ！」

夜番には、杉脇さんら4人が挙手してくれました。男女2人ずつが組んで2組そろったので、「どっちが先にやるのか、ジャンケンしてよ」と彼らに言うと、またみちよが「ジャンケンポン、あいこでしょ」と歌うように声を挙げたのです。横目で見ると、小さく呟くようにそれを繰り返しています。

動揺はさらに激しくなり、2組の人たちへの注意喚起も忘れ、そしてミルクを与えることも全く失念して、その場を逃げるように去り、シュラフに潜り込んでしまったのです。

翌朝、まだ暗いうちに坂口に起こされ、榛名から車で運び込んだ荷物を小屋に運び上げる作業をすることになりました。7～8人で下山したのですが、この時坂口が、「走ろう」と言い、先頭に立って走り出しました。私を含め皆がその後に続き、一斉に走り出しました。特に急ぐわけでもなかったはずですが、皆懸命で、全力疾走しました。恐らくこれは、皆が潜在的に抱いていたはずの、〝この場から逃げたい〟という欲求を満たす代償的な行為ではなかったのか、と今思います。〝擬似逃走〟ともいうべきもので、心理的なストレス発散となったように思えます。

みちよの死に直面し心に穴のあいた感覚が…

荷上げを終えて少しした頃です。杉脇さんが森に報告に来ました。

「並木がへんです。動かないんです」

エッと思いました。山を降りていく時に、彼女の背後を通ったのですが、その時には、首を少しうしろにひねるような動きをしており、安心していたためです。そのため、2時間ほどして戻った時には、確認せず素通りしてしまっていたのです。

急いで、森の後を追うように現場に行くと、医者の卵である青田氏（弘前大医学部出身）が、脈や瞳孔を診たりしており、森に向けて首を振りました。

ついさっきまで生きていた、との思いがあった私は、青田氏に向けて、「子供だけでも助けられないか」と問いましたが、彼は「もう血流が止まっているので無理です」と、きっぱりと答えて本当にガックリしました。

何とも言いようのない感情がこみ上げましたが、それを隠すため、また乱暴な

口調で言い放ちました。「子供まで道連れにしやがって」と。居たたまれず、その場を去り、シュラフへと向かいました。

その時、背後から森の問う声がしました。

「ミルク、やったんだろ」

ガーンと、頭を殴られた感じでした。初めてこの時、ミルクを与えることを失念していたことに気付いたのです。

「あー」と後悔の念が湧き起こりましたが、それを圧し潰すように、口にしました。

「やっても、おんなじだった……」

シュラフに潜り込むと、身体が奈落の底に沈み落ちていく感じがしました。そして、〝ああ、とうとう死んでしまったか〟との思いがこみ上げ、身体の中心部に、ポッカリと穴があいた気分に捉われました。

身の置き所のない思いの中で、自分でも訳のわからない行動に出てしまいました。

シュラフから出ると、数メートル離れた所に置かれていたベビーベッドに寝かされていたライラちゃんのところに赴き、抱き上げると、またシュラフに戻って、脇に置き添い寝をしたのです。

（ライラちゃんは、山本順一氏夫妻の娘で、生後3カ月くらいでした。この名前は、中国語の〝ようこそ〟（来々）から名付けられた、とあとでわかりました）

今思えば、全く自分本位の情緒に流された行動で、それこそ〝総括モノ〟でしたが、これについては、森らから批判されないままとなりました。

それまで、触れることはもちろん、近付いて顔を覗き込むこともなかったため、皆怪訝に思ったはずです。間もなく母親の山本夫人が、恐る恐る近付いてくると、「あのーこちらで世話しますから」と言って連れ去りました。

もしミルクを与えることを忘れていなかったら――それは幾度も幾度も自問してきたことです。

〝開腹処刑〟は、そのために使用するメスの購入を命じられた青田氏が、〝入手できなかった〟と言って戻り、事実上拒絶していた状態であり、回避し得ていたように思えます。

とすれば、ミルクを与え続ける中で、彼女は生き続けられたのかもしれない……。しかしそれは、一層の苦痛を強いる道ではなかったか……。

16歳の少年を見張りにしてほしい……。その思いには、彼なら縄を解いてくれるかもしれない、との期待感が潜んでいたようにも思えます。

みちよの死後、私が歩んだ道は…

実は、私も一度、今なら彼女を救えるかもしれない、との思いが湧き起こったことがありました。死去する前々日の夜になりますが、私と加藤倫教氏とで夜番に当たったことがありました。薪木が乏しくなって2人で拾いに出たのですが、倫教氏はどんどん進んでしまい、私1人が小屋付近に取り残されたのです。

見下ろすと、1人縛られた彼女の姿が見え、2人だけの空間であることに気付きました。その時、ふっと、〝今なら〟との思いが立ち上がったのです。しかし、すぐに思い直しました。こういう気持ちになっては駄目なんだ、情に流されてはならない。そう考えて、その思いを封じ込んだのです。

実際問題として、彼女は身重である上に、恐らくまともに歩けなかったはずですから、すぐに追手に捕獲されてしまうことは、今思えば明白です。

もしミルクを与えていれば、私が優しくしてくれた、と彼女が考え、甘え心が湧いて直接「縄を解いてちょうだい」とねだってきたかもしれない。その時、私は彼女を叱りつけ、殴らねばならないのが、〝論理〟に基づいた態度なのだが、それができただろうか……。

彼女が、私に対して、助けてほしいと訴えたり、私の責任を問い難ずるような態度をとらなかったのはなぜか……。私が彼女の願いに応じる可能性がない、との諦めの境地に至っていたのか、あるいは、私が窮地に陥ることを案じて、手控えたのか……。

振り返ると、私は、〝革命〟や〝闘争〟そして組織を第一とし、彼女との関係を第二とする道を歩んでしまったのですが、それでも彼女は私と別れず、行動を共にしようとし続けてくれました。

それは、一方で、私の中に、知的障害の兄を思いやりつつ過ごすことによって培われた優しさが根付いていることに気付き、希望を抱き続けたのではないか、と思われること。そしてもう一方で、私が安易に命懸けの行動に走ってしまう傾向があることから、それを押し止め、私の命を守ってやらなければ、との思いを抱き続けたのではないか、と思われるのです。

思えば私は、指導者にとっては使い勝手の良い〝駒〟でした。自己肯定感が乏しく、自信を喪失し、根無し草の如く、組織や革命、闘争に献身、落命も辞さない性分だったためです。

他方、みちよはといえば、そういう私を守りたい一心で行動を共にしつつ、何とか私を組織から切り離し、安全に生きてほしい、と願っていたわけで、指導者からすれば、許し難い存在と映っていたはずです。

みちよの死を、まるで待ち望んでいたかの如く、永田が森を誘って、下山、上京して、結婚に至ったのは、指導体制保守のための、一番の障害が除去された安堵感によるものではなかったか、と思います。

それが、過てる組織、〝新党〟の指導体制の完全崩壊の起点になったわけで、みちよら14人の組織関係被害者と、その後の山荘関係被害者の方々が命を懸けて生き抜かれたが故の、極めて重大な成果に他ならなかったのではないか、そういう思いを禁じ得ません。

彼女の死後、私が歩んだ道は、一方で、森らの〝論理〟に縛られつつ、他方でその呪縛から逃れて、みちよに願われ望まれていた〝優しさ〟を芯とした人間性を回復、獲得していった過程ではなかったか。そう思っています。

次号以降、それを詳述させてもらい、この連載を締め括らせていただきたく思います。

元「連合赤軍」メンバー獄中手記⑩

みちよと子どもの死後のこと、そしてあさま山荘銃撃へ

吉野雅邦

1970年代に社会を震撼させた連合赤軍事件当事者の初めての長期にわたる獄中手記。痛恨の妻の殺害からあさま山荘銃撃事件へと、当事者ならではの迫真の描写だ。

はじめに

無期懲役で服役中の元連合赤軍メンバー吉野雅邦さんの手記も佳境を迎え、あさま山荘銃撃事件への経緯に至りつつある。銃撃事件と、その前の同志殺害は、吉野さんを含め、関係者にとって今なお重たく省察を迫られている事柄だ。特に吉野さんにとっては、自分の子を身ごもっていた妻みちよさんの殺害はいまだに痛恨の思いであるに違いない。

また障害者であった兄については以前、思いがけない再会の話が書かれていたが、今回の手記では、母親がその兄を守るために必死で、兄の小学校の5年余りを隣席で付き添ったというエピソードや、吉野さんがその後、政治活動に関わることになったきっかけのひとつとして障害者に対する社会の差別があったことが書かれている。

懸命に子どもたちを守った母親は、あさま山荘銃撃現場を訪れて吉野さんを説得しようとしたことで知られているが、家族について、吉野さんがどんなふうにとらえ返し苦悩してきたかも興味深い。

社会を震撼させたあの事件から既に50年以上経過しているが、吉野さんにとっては、元気なうちに何としてもやり遂げなければならない課題なのだろう。あさま山荘でのリアルな描写も迫真性がある。

なおこの連載手記に書かれた人物は原則実名だが、一部例外もある。今回より仮名についてはその旨表記することにした。

（編集部）

みちよと子どもを救う手立てはなかったのか

私の子どもを身籠（みごも）り、8カ月（のちに1650グラムと判明）まで育ててくれていた金子みちよを死に至らせた後の経過に言及する前に、検討させて頂きたいことがあります。

それは、彼女と子どもを救う手立てはなかったのか、ということです。

赤軍派の森と坂東が榛名に来訪（71・12・20）して以降、夜を徹して行われた永田らとの臨時指導部会議の場で、その協議内容を理解しなければと、私は必死になって耳を傾けました。しかし、よく判らないまま、加藤能敬氏への暴力行使が提起され、私は、末端の自分がやらねばと思い、それに志願しました。

ところが、殴打そのものへの抵抗感情や、能敬氏への同情心が湧いて途中で殴打をためらったことを森から批判され、以降、自分の中のそういう心情を〝日和見主義〟とみなし、それを払拭すべく努めつつ、「論理」にしがみつき、自分に課された任務として、一連の暴力行使に携わり、指導者に隷従ともいうべき態度をとり続けたのです。

ですから、この時点での自分には、どんな〝チャンス〟があっても、彼女らを救う行動は望むべくもなかった、と思えます。通常なら抱くはずの〝救わねば〟との思いを抱かず、逆に〝救いたい〟との思いを封殺することに必死だったためです。

考えてみると、彼女への愛情を、抱くべからざる〝私情〟とみなして、それと〝闘ってしまう〟傾向は、一貫してあったように思えます。

第一次羽田闘争（67・10・8）の際、集結した萩中公園から空港への駆け足デモが始まったのですが、左隣りの彼女が遅れ出し、考えた末に、彼女の左隣りにいたS君に、「彼女のこと、頼む」と言い置いて、スクラムを解き、一人先頭に遅れまいと走り出してしまいました。彼女を守らねばとの思いより、課された行動をやり切らねば、との意識を優先させてしまったのです（ちなみにS君は、彼女をめぐっての強力な恋のライバルだったのです）。

また、羽田突入火炎ビン投擲（とうてき）事件（69・9・4愛知外相訪ソ訪米阻止闘争）では、引き止めようとした彼女の「私と闘争のどっちが大事なの」との問い掛けに対して、「どっちが大事というものではないと思う。でも、もしどちらかを選ばなければならない時があれば、闘争の方を選ぶと思う」と答えて、その制止を振り切ってしまいました。長く待ち望まれていた同棲生活を始めて2カ月に満たない時点でのことでした。

彼女との〝新婚〟生活は、私にとってもとても嬉しく、ささやかな幸福感を味わえるものでしたが、他方で、工員＝労働運動への奉仕という〝任務〟の方は全く展望が描けず、居心地が良くないこともあって、提示された〝決死隊入り〟を受容、志願するに至ったのです。

障害者の兄を母は必死に守った

もともと、横浜国立大を飛び出したの

は、この社会体制が、ベトナムをはじめとするアジアの民衆や国内の底辺労働者らの犠牲の上に成り立つ犯罪的なもので、市民的な幸福をめざして生活を送ることはその誤てる体制を支えてしまうことになる、との思い込みもあってのことでした。

そのため、この決死的行動によって〝前科者〟になってしまえば、そうした市民的生活への退路を断てる、そんな気持ちも働いたのです。

さらに突き詰めて考えれば、私が〝幸福〟に対して忌避感を抱き、感情を制圧しようと努めたのは、幼少の頃からの性向でもあったことに気付きます。

出産時に、臍の緒が首に二重に巻きついて仮死状態で生まれた兄は、てんかん発作を繰り返すようになり、知的発達が遅れました。その兄を守るために、母は大変な苦労をし、必死でした。小学校の5年余りを、終日付き添い、授業も席を並べて受け続けました。勝気でプラス思考の母は、〝お蔭で新仮名づかいを覚えられた〟と後年語っていましたが……。

私は、その兄を守り、また母を楽にさせることが自分の役目と任じ、〝何をしたいか〟よりも、〝何をすべきか〟を常に念頭に置くような過ごし方をしていたように思えます。そして、兄に比べて知能に恵まれ、五体も満足であることに後ろめたさを感じ、兄の〝病気〟を神様に治してもらうためにどんな犠牲を払うべきか、頭を悩ます状態でした。

決定的だったのが、先の第一次羽田闘争に先立ってなされた中核派メンバーの友人からの説得で、〝三菱は死の商人〟と説かれたことでした。

当時のベトナム戦争で、米軍の戦車に三菱重工製のキャタピラーが使われていることなどからの見方でしたが、日本の高度成長による繁栄は、かつての朝鮮戦争やこのベトナム戦争の特需にもとづくもの、即ちアジア民衆の血の犠牲によって築かれたもの。そんな思いでいたたまれない気持ちに捉われるようになったのです。

特に、私の父は、三菱地所という不動産業のトップを占め、三菱グループの屋台骨を支える企業のエリート社員でしたから、私の父への思いは、大きく反転しました。従来は、この会社が当時の東京証券取引所の〝特定銘柄〟の2番目に紹介されたり、丸の内地区に多数のビルを所有、管理していて、外国企業が日本に進出する際、事務所開設のために真っ先に訪れると知り、父を誇らしく思い、尊敬していました。

しかし、先の説で私は恥ずべき出自を持つ身との意識を抱くようになり、自己否定思考を強めたのです。

兄のような差別される者がない平等な社会を

そんな中で、私が唯一感情の統御を緩め、心を開いたのが、みちよに対してでした。性的欲求に負けたと思い、自死を図ったものの死ねなかったため、自分を解き放ったのです。

関係が深化する中で新たに立ちはだかったのが、革命左派の下部青年組織で、革命運動や組織活動が〝やらねばならない〟課題となるに及んで、彼女との性愛関係は制御すべきものとして、次第に後景に退いていきました。

革命運動は、本来自己肯定志向の集積であるはずです。幸せに生きたいのに生きられないから、体制変革を求めて、多くの人々の共感をもとに組織を拡大するべく努めて、願いを実現し、未来をめざすのです。

ところが私は、確かに抽象的な願いや希望はありましたが、それはベトナム戦争などのあらゆる抗争のない恒久平和の実現や、兄のような差別される者がない平等な社会の実現といった〝夢〟に近い〝目標〟でした。

榛名ベースのC・C会議の場で、森がこんな述懐をしたことがあり、衝撃を受けました。

「俺は、革命戦争に勝利して、革命が成功したら、普通の労働者になりたいな」

まず驚いたのが、彼に指導者であり続ける意思がないことを知ったことでした。彼は、もともと周囲の幹部が逮捕されたり、離脱したり、また出国する中で、最高指導者に押し上げられた状態でしたから、その立場を重荷に感じていたはずです。〝やめられるものならやめたい〟と吐露した永田を諌めた際の軽い調子から推察すると、彼もまたそんな思いを内に秘めていたように思えます。

彼は逮捕された翌年の元旦に、死への恐怖に挑戦するが如く、自死を遂げたのですが、逮捕されて自殺してしまうような人が、「革命家」をめざしたこと自体に無理があったのだ、と思わないわけにはいきません。私もまた彼の立場であったら、そうしていたかもしれない、と思うので、そう感じるのです。

もう一つの衝撃が、自分自身について、私が、革命戦争に勝利するとか、革命が成功するとか、思ったことがないことに気付かされたことです。

自分の将来について何となく思い描いていたのは、敬愛していた柴野春彦氏（70・12・18上赤塚交番襲撃で射殺されてしまった横国大経済学部の先輩）の如く、警察官の反撃に遭って射殺されてしまうことで、それが自分の〝革命戦士化〟の結末のような印象です。

そんな覚束ない未来予想の中で、子どもを作ってしまったわけです。

子どもについてみちよと話し合った

山岳ベースに入って1カ月ほどしての71年7月上旬、塩山ベースから三峰方面に調査に赴いた際、誘われるようにして彼女とセックス。避妊具がないため、切迫していることを告げつつ身を離そうとしたのですが、逆にしがみつかれてしまい制御を失いました。

「大丈夫なの?」と問いますと、「フフ……」と笑うのみ。直後に内部を洗い流すと、いくらか効果がある、と聞いていた私が、「洗ってみる?」と聞くと、彼女は、気怠そうに「ううん、いいの」と……。

その後、1カ月前に逃亡、離脱した向山茂徳氏に関する情報が入って、強制連行し監禁し説得方針が立てられるが、早岐やす子さんの失踪、離脱に直面してベースを塩山から丹沢に移動。この際に、悪阻と思われる症状が出て、妊娠が確定。

丹沢への移動翌日に、いきなり両名の殺害任務の指示がなされ、一旦ためらうも結局応諾して決行（71・8・3～10）。

その直後の帰山前に、まず永田に自己批判しつつ懐妊を報告しましたが、あまり批判されず、むしろ歓迎するとの態度で、シンパの医師もいるので産んで育てよう、と督励を受けました。永田は、真岡事件前の小山アジトで、〝活動家が妊娠した場合、当然の如く堕胎してきたことを改めるべき、活動しつつの出産―育児をめざそう、との見解を述べ、私も賛意を抱いたことがあったのです。

8月の中旬、丹沢ベースで子どもについてみちよと話し合ったことがありました。以前2度も彼女に堕胎させていた私は、今度は産んでほしい、との思いをまず話しました。2度とも、私たちにとっては、大きな転機に近付く頃で、購入していた避妊具を彼女に預けていた私は、その使用を彼女に委ねていました。

私に、何より子供の命を尊重し、それを優先する姿勢があれば、また、彼女の思いを忖度（そんたく）しそれを尊重する思いがあり、更に、一般的な市民的生活を肯認する気持ちがあれば、出産・育児の道を選択していたはずですが、いずれも欠けており、結局、自分の〝闘争第一〟〝革命第一〟の姿勢で、堕胎を余儀なくさせてしまったのです。

3度目の堕胎は、母体に回復不能なダメージを及ぼし、出産できない身体になってしまう、そういう懸念も抱いての彼女へのお願いでした。

彼女は、渋い表情で次のように語りました。

「もともと、この山の生活の中で夫婦というのは意味がなく、無理なのよ。塩山の時に作った〝夫婦の小屋〟も使うことなく移動してしまったし……」

夫婦の小屋は、永田の発案で、2棟のテント小屋の上流100メートルくらいの平坦地に、2週間ほどを費やして作ったもので、完成してすぐに、早岐さんの失踪で、ベース移動となり、使用することなく放棄するに至ったのです。

みちよの言い分は、夫婦関係を維持し、出産・子育てをめざすのであれば、個の自由のない山の生活を続けるのは無理、ということでしたが、2人の下山者の殺害を通じて、私の中では、〝下山は死刑に値する重罪〟という不文律が出来上がっていたこともあって、山岳ベースからの離脱は絶対許されないこととなっていました。

そこで、永田に言われた〝イザという場合にはシンパの医師もいる〟ことを挙げて、何とか山での出産・育児をめざそう、との思いを、彼女に押しつけてしまったのです。

臨月を迎え、入院が必要になった時点で対応すればよいか、という大変安易で無責任な気持ちで過ごすうちに、両派の合体化や暴力的総括要求といったのっぴきならない事態に立ち至ったわけです。

振り返れば、当時の山岳ベースは、戦場そのものでした。〝殺すか殺されるか〟という状況の中で、一挙手一投足に極度の緊張を強いられたのです。

麓の街に下り立って物凄い違和感に…

それを実感したことがありました。72年1月5日、それまでに亡くなった4人の遺体を埋没する地を探すために、麓（ふもと）の街に下り立ったのですが、車を出た途端に物凄い違和感に襲われました。

正月明けの、穏やかな空気の中で、自分自身が殺気のような気を放っている感覚に捉われたのです。もし、近くにベテラン刑事が居れば、あるいは剣道の達人が居合わせれば、間違いなく異常を感じ取ったはずです（あるいは、森は、そういう命懸けの状況の中で、「革命戦士」が練成されていくもの、という錯覚に陥っていたのかもしれません）。

一旦戦場の中に組み込まれてしまうと、そこから脱することは容易ではなく、そこに至る前に手立てを講じる必要があったように思えます（ちなみに離脱した岩田氏は、組織の追っ手を警戒して、遠方の親戚に身を寄せ、さらに、恋人が拉致され人質とされることまで想定したりしたようです）。

あの時こうであれば、と思い返すことが1件あります。それは71年11月下旬、府中市是政のアジトに家宅捜索が入り、5人のメンバーが逮捕された時のことです。

逮捕理由は、押し入れからピストルの弾が発見されたためですが、それはみちよがシンパから譲り受けたもので、帰山するまで一時的に置いておいたのです。

みちよが外出先から戻ると捜索の最中で、まずいと思い、刑事の追跡を逃れて、井川ベースに帰還してきました。すんでのところで逮捕を免れたその顛末を、中央指導部の場で報告したのですが、私は、喜べず彼女に冷淡な態度をとってしまったのです。

喜べなかったのは、心の隅に、むしろ逮捕されてしまった方が、安全に出産を迎えられるのではないか、との思いが潜んでいたためです。しかし、それを口にすることは憚（はばか）られたため、彼女には、5人逮捕についての〝責任〟を問うような言い方をしてしまいました。

彼女は、そうした私の態度に、目を丸くして、「えっ、嬉しくないの!?」と、顔を曇らせ、以後、悩みの種となったようでした。私が喜んで迎えてくれると信じて、必死になって戻ってきた彼女の思いに気付かなかった私への落胆は大きかったはずで、後の彼女からの離婚表明の大きな要因になったと思えます。

私が離脱の道を選ばなかった原因の一つに、やはり革命左派が身を託すに値する革命組織という思いがあったことも事実ですし、その点検も不可欠なので、後に詳述させて頂きます。

みちよの死後、たどった道程

さて、みちよの死後、私がたどった道程について要点を絞って点検して参ります。

▼みちよの遺体埋没に、坂東、植垣氏とともに私が任命され意外だった。恐らく坂口の温情ではなかったか。一方で、全裸にして土中に埋没することが、本人や遺族へのこの上ない侮辱であることを初めて認識。

▼榛名ベースの小屋焼却作業の帰途、渋川市のバスターミナルで前沢氏が失踪。

植垣氏はすぐに〝逃亡〟と判ったようだが私はそう思えず、立場での意識のギャップがあったことに逮捕後気付く。

▼同じ帰途、迦葉ベースに向う林道で、下山してくる坂口に出会い、山本氏夫人の逃亡を知る。更に、ライラちゃんを背負わせたNさん（看護学生）を榛名に派遣したことや、緊縛中の山田孝氏の縄を解き、来襲が予想される警官と闘うために銃を持たせてあることも聞くが、この解縛などに疑問を感じて植垣氏に再緊縛を指示。私は、途中まで下ろされた荷物類の番をする。

▼坂口がレンタカーを借りて帰還。妙義の洞窟へ移動するため荷物の整理。女性用のおしゃれな外出着など大量の衣類を焼却。その中にみちよの初デート時のレモンイエローのワンピースや私がプレゼントしたブローチ、ネックレスなどが見えて、大切な遺品を燃やす坂口に恨みがましい思いを抱く。

▼緊縛したままの山田氏や大量の荷物類を下の林道脇まで運び降ろし、運搬や移動についての協議をするが、坂口と坂東のみで行い、私が排除されたため不満と反発を抱く。これがのちにずっと尾を引く。恐らく、森らから私について〝並木（みちよ）の総括ができていないから気をつけろ〟といった指示があったのではないかと思う。「あさま山荘」内で坂東のつまみ食いに立腹して、「こんな意識では闘えないので何とかして欲しい」と坂口に訴えると、「いいか、君はまだ並木の総括ができていない身なんだぞ」とはねつけられるが、結局坂東が形ばかりの〝自己批判〟をする。しかし最終日の昼、坂東は一人で食料を漁り、隠し置いていたらしいカステラをすべて貪り食ってしまって呆れる。また、高圧放水を避けるため坂口とともに掛け布団に潜る形で逮捕に至ったが、その直前に、「やっと総括できたな」と言われ、最後まで奥のベッドに退避しなかった頑張りが認められたと嬉しく思うとともに、〝何を今更〟との思いもして複雑だった。

▼妙義に移って林道脇の仮テントに入った後、植垣氏と麓への買い出しに当ったが、戻ってヤケ食いをするなどして鬱憤を晴らす。

▼籠沢の洞窟に移動後、上京して戻った坂口から永田との離婚と永田・森の結婚を知らされる。坂口がC・Cを辞める、と口走ったり、山田氏を解縛するなど判断がブレ、永田と距離ができており、また下山上京時に、永田が森を伴っていたことなどから、この事態はある程度予想し得たものとの思いもあって、さほど驚かなかった。ただ平静を装っていたが坂口の傷心はいかほど、とそれが気になった。

この時、加藤兄弟が逃げることを考えるかもしれないから、2人を一緒にさせないよう気をつけるようにと言われ、了解してそう努めた。この後の妙義越えやあさま山荘内でも、坂口は兄弟を離させることに腐心し続けたことが伺えた。

▼緊縛して洞窟前のテント内に入れておいた山田氏が、テント外の雪を食べたりしているとの報告が入り、私から坂口に縛りをきつくしないと駄目なのでは、と打診したところ、「それなら君がやってくれ」と言われ、不服の思いを抱きつつ実行。

それから数時間後、見張りのメンバーから異常が報告され、駆けつけ様子を見ると絶息していた。私のせいだ、と思うも、それまでと同様、仕方のないことと考え、自責の念を殆ど抱かず。森の説く〝論理〟に完全にはまりこんでいた。

なお、私は寺岡氏処刑後、C・Cが厳しい総括を求められる事態に至れば、即〝死刑〟に処されるもの、と観念しており、山田氏に対する森の処置や判断は甘くおかしいのでは、との思いを漠然と抱いていたこともこうした対応に影響していたと思う。

森と永田の逮捕報道に驚く

▼山田氏の遺体埋没後の帰路、道路脇の新聞販売店で植垣氏が購入した新聞で、榛名ベースの焼却跡などが発見されたとの報を知り、C・C3人の協議で、「袋田の滝」方面への移動のため先遣隊の派遣を決め、植垣氏と杉脇さん（仮名）がO君運転で出発。上京する坂口も同乗。ところが林道で、森・永田を追う刑事と遭遇。指名手配の出されていない杉脇さんとO君を車に残して、坂口・植垣氏が駆け戻って来た。

すぐに妙義山越えをめざして出発することになったが、2日間殆ど寝ていず、食事後眠る予定でいた私は、〝もう疲れた、逃げなくていいよ〟くらいの思いで、不貞腐れながら準備に当たった。その様子を見られたのか、私は行軍の中ほどの位置が割り当てられた。先頭を坂東と植垣氏、そして、しんがりを坂口が務めた。

▼ヘリによる上空からの捜索を警戒して、夜間に行軍し、昼間は洞窟でビバーク。

▼その洞窟内でのラジオ放送が、〝籠沢付近で男女2名を逮捕、女は永田洋子〟と報ずる。〝ああ、とうとう逮捕されたか〟というのが初めの感想。寺岡恒一氏は、彼女が逮捕されれば、最高指導者となって金が自由に使えるなどといろいろ妄想を抱いた旨の告白をしたが、実は私も彼女の逮捕を夢想。私の場合は、普段鼻っ柱が強く、人を批判しまくり、絶対に自らの誤りを認めようとしない彼女が、もし逮捕されたらどんな態度をとるのか見てみたい、といった思いを抱き続けたための感想。むしろ気になったのが、男は誰だろうか、シンパを連れて帰山してきたのか……。

▼2時間ほどしての第2報で、〝男は森恒夫〟と報じられて、えっと驚き、信じられない思いに捉われた。というのも、森であれば殺されるまで闘い抜くはずで、生きたまま逮捕されることはあり得ない、と信じていたため。この時から偶像が崩れ始め、自ら心身を縛っていた縄が解けていった感じ。坂口は、「2人を奪還するためにも闘い抜こう」と檄を飛ばしたが、私は、2人とも敗北者で、そういう者を奪還しても意味がない、という醒めた思いで聞き流した。

坂口は、あさま山荘侵入の翌朝の会議でも、〝管理人女性を人質として2人の解放とわれわれの逃亡を保証させよう〟と主張したのだが、私は、1人の一般人女性の人質で当局がそんな要求を呑むはずがないと反対。結局、人質案は撤回され、〝とにかく徹底抗戦し1人でも多く

の機動隊員を倒す〟という方針に切り替えられた。この時、私が〝人質としないなら彼女を解放しよう〟と提言したが、坂口に〝彼女の口からわれわれ内部の情報が警察に漏れることになる。利敵行為になるから解放しない〟と断られて、私も仕方なく断念。

▼あれは谷急山だったか、断崖絶壁を植垣氏が上から垂らしてくれたロープを握り、最初に登ろうとしたところ、岩に引っ掛かっていたロープが大きくずれたため、身体が振られて深い谷に落ちかけた。半分死にたい思いもあったためか、ロープを握っていた手に力が入らず、1メートルくらい滑り落ち、ああこれで死ぬんだ、と思った途端、足がわずかに棚状になった岩に着き、落下せずに済んだ。「わあーっ」と叫んでしまっていたため、とても恥ずかしく、他の下部メンバーの嘲笑を感じ、その顔が見られなかった。死の瞬間のわずかな時間に、全人生が早送りの映像のように流れて見える、というのは本当なんだとわかった。

▼終始先頭でラッセル役を務めていた植垣氏の靴が破れ、疲労もひどいため、代わりに私が指名され交代。ところが、地図を見誤り、目的地の佐久市郊外と思って下りた地点が、あとで軽井沢の別荘地と判明。分譲地の舗装道路上に雪をかき集めカマクラを作って、その中で寒さを凌ぐ。この時、私は、時間をかけてカマクラを作るまでもない、雪で外壁と天井を作れば十分、と考えて別行動をとると植垣氏も加勢してくれたのだが、崩れて仲々板状の壁ができず、結局断念。最後の頃になってカマクラ作りに参加。そのため、入り口付近に身体半分のみ入らせてもらうこととなった。

▼早朝、下山して佐久市の駅に出られるよう衣服や食料を購入する〝買い出し班〟4人を編成。坂口は、私を指名したかったようだが私は名乗りを挙げず、結局、植垣氏と青田氏（仮名）、そして女性のIさん、Tさんの4人が出発。

さらに植垣氏ら4人が軽井沢駅で逮捕

▼朝8時頃か、倫教氏が付けたラジオで、4人が軽井沢駅で逮捕されたことを知る。何で軽井沢に行ったのか、と首を傾げる中で、坂東が「あのバカが」と植垣氏をなじるので不快感を抱く。「やはりC・Cが行くべきだったな」と口にしたのは私への当て付けだったのかもしれないが、それもまた傲りと感じ嫌悪感を抱く。

▼5人で今後の行動方針を協議。私は、とにかく長距離トラックでも乗っ取り、機動隊の阻止線、包囲を突破して、別の山岳地帯に逃げ込みゲリラ戦を闘う、という方針を提起。それについて検討中に、上空からヘリが接近してくる音が聞こえる。すると、坂口が脇のリュックを掴むと大慌てで飛び出す。〝バカな〟、白一色の中を人が動けば、〝ここに居ます〟と知らせるようなもの、そう思っているところに、今度は同じように坂東が飛び出る。加藤元房氏（仮名）が続くので、仕方なく私と倫教氏とで、まず外に出されていたリュックなどをカマクラの中に放り込み、その上で蹴飛ばしてカマクラを崩してから3人を追う。ヘリは、のちに侵入したあさま山荘あたりと思われる地点で、大きく旋回して麓方面へと去っていったか、こちらを発見したのかどうか判らず不安が募る（のちに発見されていなかったことが判る）。

▼100メートルくらいか、坂道を走り下りると、視界が広く開け、そこに立つ看板の前に坂口ら3人が待っていた。看板には、「軽井沢ニューレークタウン」の文字があり、ここが佐久市でなく軽井沢と知る。

▼倫教氏と私が看板の所に到着するや、坂口と坂東は更に下り始め、道の右側に広がる窪地（逮捕後ここが人造湖のために掘られたものと判明）に下りて横切り、向かいの道路下のバンガロー風別荘（さつき荘）のベランダから中へと入り込む。そんな予定はないはずなので、怪訝に思いつつ後を追い、中で「どうするんだ」と坂口に問うと、「ここで態勢を立て直す」。そう言いながら、坂東とともに、レンジ下の引き出しを物色し、スパゲティを取り出すと調理し始める。この2日以上、ろくに食べ物を口にしていなかったため、おこぼれにあずかる感じで腹に収めると、坂口が「カマクラに残してきた物を運んでくれ、足跡も消してきてくれ」と私と倫教氏に指示してきたため、実行。坂口への不信感や不満を抱きつつも、これは必要なことと思ってのこと。

▼戻って再び坂口にどうするつもりか聞くと、「ここで夜になるまで待機して、それからスケート客を装って東京のアジトに向かう。銃はここの床下に埋めて、ほとぼりが冷めたら取りに来る」と言うので、再び〝そんなバカな〟と呆れるとともに反発。夜まで無事でいられるわけがないし、スケート客を装って軽井沢駅を通過できるとは思えない。それに、銃を埋めてまた掘りに来るなど不可能に近い（すぐに警察に発見されるのは必定）、そう思いながらも、坂口らは、雪を溶かした水で顔を洗い、押し入れから次々と衣類を取り出し着換えを始めており、それを目にすると、異議を申し立てたい気持ちも萎えた上に、ひとり取り残されている焦りも芽生えて、仕方なく彼らに追随して、スゴスゴと顔を洗ったり着換えを始める。心の中で、〝これはおかしいよ、絶対に〟と文句を呟きながら。

▼皆は和室で横になり仮眠をとり始めるが、私は替えのズボンがなく、膝にカギ裂きのある汚れ切ったコール天のズボンのまま。とてもこれで町に降りるわけにいかない、と思うと仮眠に入る気分になれず、1人居間で、どうするべきか、思案にくれる。皆は、銃を居間の奥に一まとめにして置くが、私はソファのすぐ脇に構えたまま。心の中で、絶対に機動隊が捜索に来るに決まってる、と呟き続ける。

機動隊と銃による応酬に

▼午後3時近くだったかと思うが、外から人の声が響く。「こっちだ、こっちだ」「こっちにもあるぞ！」。機動隊だ、足跡が発見されたんだ、とわかる。そら見ろ、やっぱり……と予想が的中した嬉しさは、すぐに、参ったな、という困惑の思いに掻き消される。声と足音が近付いてくる。銃を手に取る。他のメンバーも居間に来て、それぞれ銃をもつ。足音

は、木製のベランダに達し、緊張は極に達する。「中にいるのは判ってるんだ。手を挙げて出てこい」。警察官の声がすると同時に雨戸をガタガタと開けようとする音が響く。

いつ撃とうか、銃を構えながら息を凝らす。姿が見えるまで待とう、とためらっていると、左脇にいた坂口が発砲。「ワッ」という警官の声がすると同時に頭上でヒュン!と音が鳴り、ピシッと背後の柱からも。拳銃の弾がめり込む音とわかり、思わず首をすくめる。坂口の発砲により警官が大慌てでベランダを駆け下りるドタドタという音が響く。私も遅れたが撃たねばと思い1発撃つ。と、左方向の玄関の磨り硝子の向こうを走り抜ける機動隊員の姿が見え、そちらに銃を向けかえる。その時、倫教氏の「こっちへ来て!」という声が聞こえる。右隣に居たはずなのに……と思いつつ声の方を見遣ると浴室から倫教氏が顔を覗かせ、「こっち」というので駆け付ける。浴槽のフチに足を掛けた彼が、「あっちあっち、撃って!」とガラス窓の外の右方向を指差す。浴槽のフチに駆け上がるが、先ほど玄関前を走り抜けた機動隊員が気になり左方向を見ると、角に青いヘルメットが転がっている。落としたのか、いや、滑って転んだため脱げたのだろう……。

すぐに右方向に目を向けると、大慌てで脱兎の如く逃げ去る機動隊員の後ろ姿が。銃を構えたが、散弾銃なので窓硝子越しの発砲で散弾粒がはね返って右後方の倫教氏に当たるとまずい。銃身でガラスを叩き割ってから再び構え発砲。既に機動隊員は100メートルくらい離れた大きな岩陰に飛び込もうとしていたため、安心して発砲できた。ところが、間髪をいれず、眼前でヒュンと音が鳴り、すぐ左脇の窓枠にピシッと当る音がし、木片が飛び散る。危く命中するところで、すぐに身を引き、浴槽のフチから下りたが、その時、坂口の声で「こっちへ来てくれ」。倫教氏とともに居間に移動。

▼包囲される前に脱出することとし、和室の窓から坂口、私の順で飛び出し、坂口が道路に向かう階段につながる土手状の所まで行った時、銃声が響き、彼の足元あたりの土が、バシッという音とともに飛び散る。「撃たれた!」と叫びつつ坂口が駆け戻り、背後の私を突き飛ばして一目散に窓の中へ。その俊敏な動きから被弾していないと思え安堵するが、〝これではマズイ〟。坂口は脅えて、「撃ってきやがった」と声を震わせウロウロするばかり。

1人思案を巡らす。このままここに留まれば包囲され最後は射殺されるだけ、それなら今ここで射殺されても同じだ。転がった青いヘルメットが浮かぶ。相手も相当慌てている。もしかするとチャンスはあるかもしれない……。

▼「ヨシ、俺が行く」と宣言して、先頭に立って窓から飛び下りる。念の為、左方向に1発発砲。隊員は3人の感じ、建物の陰に1人潜んでいるかもしれないと考えての威嚇のつもりだった。そして、一気に土手下まで走り、銃を構えつつ首を上げて向うを伺う。

と、信じられないことが起きた。

〈以下次号〉

元「連合赤軍」メンバー獄中手記(11)

あさま山荘銃撃現場で母は「お母さんが撃てますか」と叫んだ

吉野雅邦

多くの市民がテレビの前に釘づけになったあさま山荘銃撃事件。その現場を当事者ゆえの迫真性に満ちた描写で詳述。獄中連載はいよいよクライマックスを迎える。

●はじめに

今から50年以上前、日本中の関心が集まったあさま山荘銃撃事件。こんなふうにまとまった形で吉野さんが手記を発表するのは、事件後初めてのことだ。

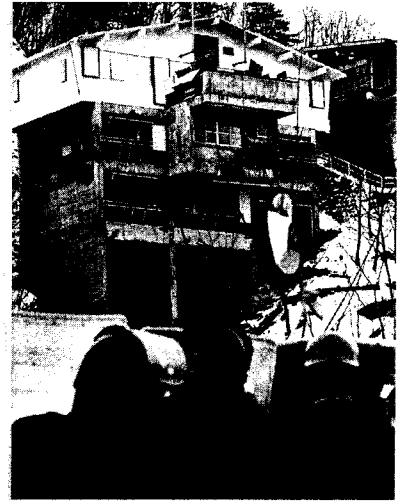
説得のために現場に訪れた母親の「お母さんが撃てますか」という声に、どんな思いで銃を向けたのか、両親の説得をどんな気持ちで聞いていたのか。当時の現場の状況がよみがえる。連載はいよいよ、次回で最終回を迎える。（編集部）

非難に値するあさま山荘籠城への道

▼土手下から顔を覗(のぞ)かせれば間違いなく狙撃される。そう覚悟し銃を構えようとしたが、目にしたのは、30～40メートル離れた大岩から横に飛び出す機動隊員の姿。その彼は、パッと後ろ向きとなり、背を見せつつ全速力で逃げ始めたのだった。引き金を引く指を止め様子をうかがうが、全くこちらを振り返ることなく、ひたすら逃げ続ける。威嚇(いかく)するまでもない。恐らく先程の発砲が功を奏したのだろう。彼を横目で見ながら、階段を駆け上り道へと出る。残った4人も次々集結。

▼その機動隊員は、正当な職務として私を射殺し得たはずで、そうしなかったのは、この山荘に接近した際に大声を発しながら近付き、こちらに準備する暇を与えたことと併せて、警察側の大きなミスだろう。逆に、私が蛮勇をふるってこの脱出を先導してしまったことは、のちの「あさま山荘」籠城への道を拓くことになってしまったわけで、強い非難に値すると思える。警察としては、足跡発見時にすぐに応援を要請し、その部隊が到着してから行動を起こせば、容易にわれわれ犯人を制圧でき、この脱出も防ぎ得たはず、と思えてならないが……。

▼道路上に5人が集まると、すぐに坂口が私に「どうする」と聞いてきた。私の先導決行で態度を変えたのだろう。それまでの持論である〝車を乗っ取っての阻止戦突破〟を念頭に、「下へ……」と言いかけるが、下からは警察の援軍が殺到してくることは明らかで、言い淀(よど)む。すると、坂口が、「夕べ山腹に民家の灯りが見えた」と言い、坂東も、「俺も見た」。坂口が、「よし」と言って上へと走り始め、坂東も、更に元房氏も追う。倫教氏と私も続いた。



1972年、あさま山荘銃撃事件

▼倫教氏と私は、機動隊の追尾を想定し、背後に目を光らせつつ走ったため、どんどん遅れ出す（背走した隊員は、窪地を周回する道路を、あのカマクラの方向にひたすら走り続けて、やがてこちらからも姿が見えなくなった。もしかすると犯人の集団は警官の命を狙うテロリストという事前の注意がなされており、われわれが追って来ると思ったのかもしれない）。坂口、坂東は一目散。急勾配のところで坂東が足を滑らせたか、いきなり地面に倒れ込む。蛙のように地にへばりついたため、普段格好良くふるまうことが多い日常との落差がおかしく、思わず笑ってしまう。隣りの倫教氏も同感だったようで、2人で顔を見合わせてニヤリ。

▼100メートルほど先をひた走る坂口が、道路右側の倉庫風建物の引き戸を開け中に入るが、すぐに「だめだ、誰もいない」と坂東に大声で報告する声がしていやな予感。〝人を探しているのか？〟

▼そこを通過し、さらに100メートル以上登った右側に立派な建物が。それが、「あさま山荘」とのちに判明。道路より下がったところの玄関に坂口が入り込む。左側の駐車スペースの車に目もくれない。と間もなく、「いたぞー」と大声が響く。坂東が、「オー！」と呼応。〝おいおい、捜しているのは車で、人じゃないだろ〟。

▼坂東、元房氏も中に入ってしまった。間もなく玄関前に倫教氏と私も着くが、全員が入ってしまえば、再び警察に包囲される可能性もある。そこで倫教氏に、「俺はここで見張ってるから、西さん（坂口）を呼んできてくれ」と頼む。追尾してくるはずの警察官の姿は全く見えない。

▼すぐに倫教氏が戻り、「ここに留まって態勢を立て直すそうです」。〝何をバカな。それでは、さっき決死の思いで脱出した意味がないじゃないか……〟

▼「ここで見張っててくれ」と倫教氏に頼んで山荘内に入る。玄関口のたたきを進むと、ピカピカに磨き上げられた廊下が。履き捨てた靴がない、このまま土足

で上がるべきか……ためらっているところに、右奥から元房氏が現れる。「みんなこのまま上がったのか?」と問うと「ハイ」。それなら仕方ないかと思い、土足のまま廊下へ。1年前に真岡市の銃砲店塚田氏宅に土足のまま押し入り、畳や布団の上をのし歩いた時の何とも言えない不快感が瞬時に甦る。

▼元房氏に付いて、右奥の部屋に入る。ベッドルーム（いちょうの間）とのちにわかる。突き当りの窓際のソファに女性が座らされ、銃を持った坂口と坂東が挟むように立ち、何やら尋問している。女性は30代と思われる美しい人だった。

▼「何をしてるんだ。車が外にある。キーがあれば逃げられるじゃないか」と坂口に。と坂口が、「キーは旦那が持って出ていて、ここにないと言うんだ」「そうなのか」と女性に問うと、「ハイ」。

▼「キーがなくても車、動かせるよな」と坂東に問う。真岡事件ではそうして事前に車を盗んで使用したし、坂東も福島・郡山の交番作戦の調査中に同じ体験をしているはずと知ってのこと。「あ

あ」との返答を得て、「行こう」と坂東を誘い部屋から玄関先に向かう。

▼駐車中の車のドアを開け、坂東がイザ〝直結〟の方法をとろうとした際、振り返りながら私に、「三木さんは運転できるのか?」と問うてくる。免許を持たず、福島での交番調査の際に、公園のような広場で、ほんの100メートルほど走らせてみたことしかない。「いや」と返答。

▼「俺はダメだし、西さんもだめだろ……誰も運転できないんじゃムリだろ」。坂東は先の作戦中に運転に失敗して、盗難車を羽鳥湖に落下させかけたことがあったと聞いていた。坂口も私と似たようなもの。2人の少年も未経験のはず。〝うーん〟と思案にくれる。車が無理なら徒歩でこのまま山に入り込みゲリラ戦を戦うしかないか……。とにかく籠城戦や占拠戦は避けねばならない……。

▼ベッドルームに戻って坂口にその提言をするが、即座に否定された。「無理だ。みな疲れ切ってるし、そもそも自分は靴がないんだ」。慌ててカマクラを飛び出した際に、靴を履き忘れたのだろう、と思い、心の中で舌打ちした。しかし、これは誤解で、植垣氏らが買い出しに出る際に、彼の潰れてしまった靴の代わりに貸してやったためとわかる（ただそうすると、坂口は靴がない状態で、スケート客を装って軽井沢駅を経て上京することを考えていたわけで、坂口自身その実現性を信じていなかったのではないか、と今になって気付く）。

▼確かに、坂口の言う通り、私も疲労の極みに達しており、山に入ってのゲリラ戦など到底無理と思えたし、その気力も喪失していた。そのため、不本意ながらもその方針に同調してしまった。

Mさんは気丈にも何度も抗議した

▼玄関口で見張ってもらっていた倫教氏をすぐに呼びに行き、中に入ってもらった。この時、早々に警察に包囲されることを覚悟した。ちなみに、警察側は、私らの人数や、上側の道を登ったことなどを全く確認していず、下の道を捜索し始めたらしいことが、のちに判明。責任者

は、あるいは上司から叱責されたかもしれない。

▼ベッドルームに戻ると、坂口がMさんを二段ベッドの梯子に縛り付けようとしていた。Mさんは、気丈にも「何で縛るんですか」と強く抗議。坂口は、「さっき逃げようとしたじゃないか」と弁明。するとMさんは、「当たり前じゃないですか。いきなり入り込んできて、銃を突きつけられたら誰だって逃げようとするでしょ」と憤りを込めてさらに抗議。それでも坂口は構わず脇の下にロープを通して吊り上げるような状態で縛ろうとする。Mさんは、「痛い」と苦情を口に。その縛り方は、みちよを縛り直した時の方法そのもので、彼女も痛がっていたのを思い出して、坂口に「縛らなくていいんじゃないか」と進言。すると、「まだバリケードを作ってないんだろ、すぐに作ってくれ」と逆に指示される。確かに警察側がすぐにでも山荘を取り囲み突入してくるかもしれない。坂東とともに、急いでバリケード作りに取りかかる。

▼玄関、管理人室、ベランダ、談話室（食堂）、1階出入口の順に、家財道具や畳を持ち出して、バリケードを作る。管理人室のMさんの生活用品や家具などを流用する際に、少し心が痛むが、警察に抗戦することが意識の大半を占めるという荒廃した心理に陥っていた。途中、坂東がポケットを膨らませ、キャンディを頬張るのを目撃。憤慨し、文句を言おうとすると、数個を摑んでこちらによこす。誘惑に勝てず、坂口らに報告しないままMさんにも断りなく、頬ばってしまう（かつて範としていた中国人民解放軍「八路軍」の「三大規律六項注意」の中の「人民の物は針一本糸一筋も盗らない」という規範への意識は完全に消失していた）。

▼管理人室のドア、窓へのバリケード作りを終えた頃、隣人と思われる人の「奥さん、大丈夫ですか。いますか」との呼びかけの声が。坂東が大声で、「奥さんはいるぞ」と返答。その声は届いていないようで、何度か呼びかけが繰り返される。電話も掛かってくる。また坂東が、「奥さんはいるぞ」と乱暴に言い放ち切る。

▼翌朝、談話室（食堂）で、坂口、坂東、私による方針協議。坂口が、〝Mさんを人質として、森・永田両名の釈放と、われわれの逃亡を保証させよう〟と発言。それが、「さつき山荘」脱出後の彼の方針だったことがわかる。坂東も即座に「異議なし」と賛同。私は、全くの市民を人質として利用することに抵抗を感じたが、既にその身柄を拘束し、住居を占拠していることを思い、倫理的な理由は通らないと感じて、結局、「一般人の女性一人を人質としてそんな要求をしても通るわけがない」と言って反対。以前に、獄中最高幹部の川島豪の解放を模索した時、坂口が、米国総領事や皇室の島津さんら要人を誘拐する案を立てたことがあり、それを意識しての発言だった。すると、坂口は少し考えて、「そうだな、よし、最後まで徹底して闘おう。警官を一人でも多く倒そう」と方針転換。坂東は、やや気恥かしそうに肯く。私も、それしかない、と思い同意。

▼そして、彼女を人質として利用しない

のであれば、解放するのが筋、と考え、「人質としないなら、Mさんを解放しよう」と提言。すると坂口がまた少し考え、「そうすれば、彼女の口から内部の情報が警察に洩れる。利敵行為になるから解放しない」ときっぱり宣言。そう言われれば確かにそうか、と解放を断念。

▼ただ最終日（2月28日）に、モンケン（鉄球）でベッドルームの外壁が完全に崩され、内部の状況が露呈した段階で、彼女の解放を坂口も私も全く念頭に浮かべなかったことを考えると、この理由はこじつけで、実際には彼女の存在を利用し、いわば後ろ楯として身の安全を確保しようとしたに他ならないと思える。

▼これは坂東にあってはさらに顕著で、彼は外壁が壊され始めると、「彼女を守る」と言って、奥の二段ベッドの下に彼女を連れ込んだ。それを見て、私は〝逃げたな〟と苦々しく思ったが、結局、私も最後には、そこに退避して行ったわけで同じ穴のムジナだった（せめてあの時、彼女に白旗を持たせて解放していたら、と思い慚愧の極みです）。

母が叫んだ「お母さんが撃てますか」

▼4日目となる2月22日のこと、前日の両親による説得活動に続いて、再び母の呼びかけが。父の「君は労働運動をやるのではなかったのか」との言葉がまだ胸に突き刺さっていた。私が大学を辞め家を出て彼女との同棲を始めた時のことをよく覚えていた父の指摘により、女性を監禁し続けている罪深さを痛感し胸が苦しかった。そこに、また母が、「世の中の救世主になるのではなかったの」と詰問しつつ、Mさんの解放を懇々と説かれ、居たたまれない思いに捉われる。

▼両親とも温和そのもので、手を上げることはもちろん、声を荒げることもなく、じっくりと話を聞き、その上で理を説くような接し方をしてくれた。暴力的な政治的行動には批判的だったが、労働者や障害者、女性などの弱者を思い、アジア民衆の立場を思う気持ちには、理解を示してくれた。

▼特に母には、幼少期から、弱い者には優しく接し、常に相手の気持ちを重んじ、その立場に立って考えるよう説かれて育てられた。それ故、私が女性を人質とするような蛮行に加担していることについて、母がどれほど心を痛め、苦しい思いをしているか、痛いほどわかり、声を聞くのが辛く耳を塞ぎたい思いだった。

▼そうした私の心中を察したのか、隣にいた坂口が、「君のお母さんはよく喋るね」と呟いた。私への同情でもあっただろうが、彼自身も閉口しての嫌味のように聞こえた。

▼母は、前日のニクソン米大統領の訪中にも触れて、「時代が変わったのよ」とも語った。私と坂口の、羽田事件の公判廷を欠かさず傍聴していた母は、私らの陳述を覚えていたのだ。日本政府がアメリカに追随して、カンボジアなどベトナム周辺国にも侵略の手を拡げるだけでなく、中国にも支配の力を及ぼしかねない。そういう危惧の念を表明していた。私らが、銃で警察側に抵抗の限りを尽くしているのは、そういう見方に基づいているもの、と母なりに想像しての指摘だったと思う。それは、的を射ていた。

▼革命左派が〝革命戦争〟路線を打ち出し本格的な武装闘争開始を呼びかけたのは70年11月頃のこと。その年の5月に毛沢東が発した声明「侵略戦争が革命を引き起こすか、革命戦争が侵略を押し止めるしかない」に依拠して、「日本革命戦争で、米日反動のアジア全面侵略戦争を打ち破れ」というスローガンを打ち上げたのだ。もっともこれは先の声明を曲解したもの。侵略を押し止める革命戦争とは、侵略国内のそれではなく、被侵略国での抵抗闘争のこと。しかも、革命左派が、銃入手に走ったのは、革命戦争開始を企図したためではなく、獄中の川島奪還のため。この奪還も中国亡命企図とセットで計画されていた。銃入手後の逃亡潜行過程で〝建軍武装闘争〟方針が案出された（山岳ベースは、〝軍〟や〝武闘〟の攻撃的拠点として設定されたのではなく、逃亡潜伏場所、即ち指導［支配］体制の保守防衛のために設営された。その破綻が、最終的な「あさま山荘」への逃亡、籠城として帰結。それ故、この山荘時点では、政治性、思想性はほぼ失われていた）。そのわずかな根拠を、母の主張は突き崩す。いわば頂門の一針となって、私らを襲った。坂口も耳を塞ぎたかったのではないか。

▼〝もう、黙っててくれ〟心の中で叫びに似た思いが募った。その時、母が、「お母さんが撃てますか」と叫んだ。その挑戦に反発するように、母の乗る装甲車の車体に向かって発砲してしまった。誠に非情、不幸の極み……自分でも言葉を失う思いで、今でも目頭が熱くなってしまう。逮捕後、上田署で母と対面した時も、母を正視できず、言葉が出なかった。母は「ええよ、何も言わんでも……。あんたの気持ちはわかっとるから」と慰めるように口にし、決して責めることはなかった。それだけに余計に辛かった。

Mさんが後日、母親に語ったこと

▼後日、その母への電話で、Mさんは、「お宅のお子さんは優しかったから」と言って下さったそうで、母は「うれしくて、うれしくて」と涙声で、東京拘置所の面会室で私に報告してくれた。この電話は、母が金一封を添えて謝罪のお手紙を差し上げたことへの御礼だったそう。

▼私は怪訝に思った。Mさんの姿を見ることも辛く、敢えて距離を置いていたから、〝優しく〟した記憶がなかったため。一度彼女に近接したことがあったが、それは誠におぞましい体験。彼女をトイレに〝連行〟したのだった。

▼坂口が終始ストーブのあるベッドルームに籠り、凍てつく〝最前線〟たる屋根裏に滅多に来ないことに立腹して、特に用もないのにベッドルームを訪れた時のこと。坂口が1束のロープを放ってよこし、「彼女をトイレに連れて行ってくれ」。目を白黒させて戸惑っていると、Mさんがそのロープを手に取り、「こうするんです」と口にしつつ片方の端を自らの腰に巻きつけ、他方の端を私に渡してくる。そして、「じゃあ」と言ってスタスタとトイレに。私はロープの端を手に持ってその後を追う。トイレは手前に3台の洗面台のある区切られたエリア。奥のエリ

アの正面と右側に計5基ほどの男子用小便器が並び、左奥に個室が3室という構造。彼女が個室へと進むので、ロープを手離し、洗面所エリアで待機。時折りロープの端の動きをうかがう。用を終えて、再びベッドルームへと戻ったのだが、人権蹂躙も甚だしい蛮行に手を染めた思いで、以後、用件のある時のみ、ベッドルームを訪れることに。

▼〝優しさ〟で唯一これか、と思うのは、彼女を囲んで討議をした時のこと。討議は、警官突入時に彼女に〝中立的態度〟の要請をするとの坂口の発案で召集されたもの。拘束し自由を奪っておいて、〝中立〟というのは全く噴飯物の話で、Mさんも首を傾げ続けたが、要は、警察側に協力したり逃げたりしない約束をしてほしい、ということとわかり、一応「わかりました。そうします」と表明。

▼その際、坂口が、「子供はいないのか」と質問。彼女は、「欲しいんですけど、できないんです」と応答。つい私は、「病院で診てもらったの」と問うてしまう。すると「私は行ったんですけど……。主人は……」と言い淀む。それを耳にして私は意気込んで言ってしまった。「御主人もいっしょに連れて行かなきゃ駄目じゃないか」。全く会話さえしていなかった私が、叱りつけるような口ぶりでプライベートなことに口を差し挟んだことで驚いたのか、Mさんは目を丸くして私の顔をしげしげと見つめてくる。恥ずかしくて目を逸らしてしまう。みちよを子供ごと死なせてしまったことが心の底にあって、せめて彼女に希望通り子供をもうけて幸せになってほしい、そんな思いが働いたのかもしれない。

▼母は電話でMさんの深刻な悩みも打ち明けられて心を痛めたという。亡くなった2人の幹部警察官の御遺族に、お詫びと弔問に訪れ、お墓参りもさせて頂くべくお願いをしたが断られてしまったそう。監禁中一貫して私らは彼女に対して、〝警察はわれわれの逮捕が最大の目的で、あなたや御遺族のことを真剣に考えているわけではない〟などと、いわば洗脳工作をし続けていた。一方で、当初こそ銃を突きつけたり縛ったりしたものの、途中からは極力優しい接し方をして、〝懐柔〟に努めていた（ように見えた）。そのため、Mさんにとっては、〝犯人たちは優しくしてくれた〟〝辛く怖かったのは、厳寒下での大量の放水であり、多数の催涙弾〟といった解放後の談話となってしまったし、10日間にわたって自由を奪われていたため、〝やりたいことは、温かいうどんを食べたり、ボウリングなどして遊ぶこと〟という実に素直な願望を語って、御遺族の怒りを買ってしまったわけで、その咎はすべて私たちが負わねばならないことは明白です。彼女には、二重三重の甚大なる被害を及ぼしてしまい、お詫びしてもしてもし切れない思いがしています。

▼ただ次のことは明らかにしておかねばなりません。それは、お2人の幹部警察官の方々は、Mさんの解放のために落命されたのではなく、警察の威信高揚のために、自ら殉職を志願され、命を捧げられたとみられることです。これについては、後に詳述させて頂きます。

元「連合赤軍」メンバー獄中手記 最終回

あさま山荘事件、そして連合赤軍とは一体何だったのか

吉野雅邦

連合赤軍元メンバーとして無期懲役の刑に服している吉野さんが初めて世に問うた獄中手記。銃撃事件現場で彼は何を考えていたのか、連合赤軍事件とは何だったのか。

●はじめに

長期にわたった吉野雅邦さんの手記連載も今回でひとつの区切りを迎える。

無期懲役で服役中の吉野さんにとって、この初めて発表された連合赤軍事件についての連載手記は、自己省察を深め、それを記録として残そうという思いによるものだった。

別稿でも紹介したように、連合赤軍事件の犠牲者で、重信房子さんの親友でもあった遠山美枝子さんをめぐる当時の書簡などがこの間、朝日新聞で取り上げられたり、『連合赤軍遺族への手紙』という書籍で公開されたりと話題にもなった。この事件は、いまだにこの社会に深い爪痕を残したままだと言える。

吉野さんの手記は、あさま山荘銃撃事件をめぐって当事者ならではの詳細なやりとりを描出するなど意義あるものだ。本誌はこの貴重な記録を、本人の加筆修正のうえ、電子書籍のような形で後世に残せないかと検討中だ。

事件後の両親とのやりとり、障害者だった兄との関わりなど、吉野さんの個人的なことについても手記では触れられており、それも貴重な記録と言える。

社会に衝撃を与えた連合赤軍事件という歴史的出来事については、きちんとした記録が残されるべきだと思う。

なお前号P93中段11行目の「不幸」は「不孝」の校正ミスだった。お詫びし訂正したい。

（編集部）

民間人の田中さんを刑事と誤認して狙撃

▼（あさま山荘籠城）4日目の1972年2月22日午後に、私は重大な犯罪行為を犯してしまいました。それは、人質女性との身代わりを志願した民間人の田中保彦氏（30歳）を、刑事と誤認して狙撃、8日後に肺炎で死に至らせ、殺害した件です。直接の狙撃者は坂口ですが、私にも重大な責任があります。

▼屋根裏にいた私に、下から元房氏が声をかけてきた。「玄関に変な男が来ている」。下に降りると、玄関先から声が。「赤軍さん、赤軍さん、私は新潟でスナックを経営している者です。Y子さんの身代わりになれたらと思ってやって来ました。撃たれてもいいと思ってるんです。……中へ入れて下さい……」

▼とても受け入れるわけにはいかない。元房氏が、「デカじゃないか」と呟くが、何とも判断がつかず、坂口を呼んでくれるよう頼む。男はなおも、「赤軍さん、入れてください」と声を張り上げる。こちらも「帰れ」と繰り返し大声で叫ぶ。上空のヘリコプターの音で聞こえないのか、しつこく「入れて下さい」と繰り返しながら、とうとう「入りますよ」と言った。ドアを開ける音がする。そして、バリケードに手を掛けたのか、ガタガタと音が響く。慌てた。乗り越えてくるのでは、との懸念も湧く。

▼警察側が「その人は警察官ではない」と繰り返し呼びかけてくるが、そう言われれば言われるほどに怪しさが増す。判断がつかない。ガタンガタンとバリケードを崩すかのような、より増長した動きを放置するわけにはいかない。意を決して、天井に向けて散弾銃を発砲する。男は、「ワッ」と叫んで、外に走り出る気配が伺える。元房氏が、「撃たれてもいいなんて言いながら逃げてるじゃないか」と非難する。

▼外に出た男が立ち去ったかどうか判らないので、元房氏に玄関脇に開けた銃眼から様子を見てもらう。戻った彼が「あいつはデカだ。ヘリに向けてウインクしたり手を振ったりしてた。デカに間違いない、やっちゃおう」と興奮して主張する。やって来ていた坂口も何とも判断がつかないのか、目立った動きを見せなかったが、この元房氏の声ですぐに銃眼に向かう。私もその後を追う。銃眼からしばし様子を伺った坂口が、手にしていた拳銃を銃眼に当てがうのを固唾を呑んで見つめる。

▼「パン」という乾いた音が響く。と同時にドサッと人が倒れる音がする。坂口が、「やったぞ」と興奮して口走りながら足早にベッドルームへと戻って行く。恐る恐る銃眼から覗くと、倒れ込んでいた男がのそのそと立ち上がり、だるそうに階段を上がって行く。〝よかった、死んでなかったんだ〟。安堵の溜息をつく。

▼男が道路に出て、坂を下りかけたところへ、ジュラルミンの楯を持った2人の機動隊員が近付き、男を支えながら坂を下って行く。〝何だ、来るならもっと早く来いよ〟と心の中で毒突く。

事件後、この方が自己紹介通りの民間人の方であることがわかり〝失敗したな〟と思うとともに、勇敢で義侠心に富

んだ方の命を奪ってしまったことを悔やみ、心から謝罪したく思った。

▼ただ、その一方で警察側の対応についていくつもの疑念を抱かざるを得なかった。

▼田中氏は、前日、警察の阻止線を突破しようとして、保護・拘束されたそう。そして、交通手段の絶えた深夜釈放され、その後の足取りは不明とのこと。しかし、氏は山荘の下から玄関前に到達しており、山荘直下の敷地を通過したことは確か。ところがその敷地には、警察の保養寮があり、当時の警備拠点になっていた。氏はそこで一夜を過ごしたわけだが、あるいは警察が釈放時にそこを紹介したのではないかと思われる。

▼山荘前に現れた者が、田中氏であることは警察側はすぐに察知し得たはず。であれば、こんな呼びかけが可能と思える。「田中さん、犯人達はあなたを警察官と勘違いして発砲してくる恐れがあります。すぐに退去して下さい」。そして、のちにそうしたように、ジュラルミンの楯を構えた警察官によって速やかな保護、救助に当ることも可能だった。ところが、警察は全くそれを行わなかった。なぜ?

▼離婚して身寄りが全くなく、覚醒剤の前科もあったという田中氏。警察は彼をいわば囮として、私らの出方を探りたい、いやもし狙撃されるような事態に至れば、「革命」を標榜する犯人達の狂暴さ、反国民性を広く喧伝し得る。そんな計算までして、敢えて放置し、狙撃へと誘導したのではないのか……。

▼また、被弾した田中氏に対する警察側のその後の対応も不可解極まりないもの。近くの医院で受診させたが、医師は後頭部の被弾に気付かず、痛み止めの処方のみで帰らせたとのこと。その後、本人の異常の訴えで慌てて大病院に入院させたものの、結局8日後に肺炎の併発で死去に至らせてしまったという。

▼警察としては、氏が山荘に至った経緯を証言し得ない状態で死去に至ったことで胸を撫でおろしたのではないか、そんなうがった見方さえ抱かざるを得ないのですが……。もちろん、そうして警察の術中に陥ったとしても、それは私らの愚かさ、幼稚さの故であり、犯した罪の重さには変わりがないことも間違いありません。

2人の警察官の狙撃も大罪だった

▼警察側の思惑に気付かず大罪を犯したのは、2人の幹部警察官の方への狙撃においても同様でした。大ベテランのお2人が、油断したり、隙を見せて被弾されることなどあり得ないのに、ここぞとばかりに発砲したのですから……。直接、狙撃したのは坂東國男ですから、正確なところは彼の証言を待つしかないのですが……（真実を明らかにするうえでも、超法規釈放され国外逃亡中の彼の出頭、証言を切望していますが……）。

▼最高指揮官だったS氏の手記（『文藝春秋』誌への寄稿）によれば次の事実が明らかです。

(1)突入日前日にS氏がお2人を呼んでこう要請しています。「犯人達は指揮官を狙ってくる。その帽子の指揮官章をはずしてくれないか」。歴戦の勇士たるお2人がそれを受け入れるはずがなく、それを見越しての要望ではなかったかと思えます。

(2)当初、Xデイつまり突入日は2月29日に設定されたが、それでは殉職者の命日が4年に1度になってしまうことを懸念したS氏が、28日に繰り上げた。

(3)また突入日の第2案として、27日も検討されたが、この日は日曜日で夕刊が発行されないため、27日は除外した（午前中には犯人の逮捕、Mさんの解放は可能と踏み、その報道を期待した）。

(4)「決死隊」（強行偵察部隊）を編成しようとしたところ、長野県警本部長が、部下の生命を危険に晒すわけにいかない、と難色を示したことに対して、S氏が、「田舎警察」と口を極めて非難。

(5)マスコミ関係者や世論が、〝警察は何をぐずぐずしている。早く突入しろ〟と焦れて催促するようになるのをじっくり待つこととする。

(6)人質Mさんの動静について、盗聴器を用いて探ろうとしたが、低温のため作動せず断念（だが、誰でも思いつくはずの、カイロと抱き合わせての使用を、実際には実行し、Mさんの健在であることを終始確認しながら、世間を焦らし誘導するため、敢えてその情報を伏せたのではないか……それ故に、大量の放水や催涙弾の使用を躊躇なく断行し、突入日の決定に際しても、Mさんに対する配慮が全く話題にならなかったのではないか……）。

▼なお、これらの諸点は、手記の単行本化の折りに削除されている。御両人が殉職を志願されて被弾したとなると、指揮官S氏の責任が問われたり、犯人の刑責が軽くなったりすることを懸念されたのではないか、と思わざるを得ないのだが……。

▼2人目の被害者である内田尚孝警視（第二機動隊長）については、伝令から「銃眼から狙われています。顔を引っ込めて下さい」との注意を受けたにもかかわらず、直後に被弾した事実が明らかです。

▼数年前のテレビのドキュメンタリー番組で、モンケン（鉄球）を貸し出し操作したH氏の証言を耳にして、驚いたことが2点あった。まず、氏が貸し出し交渉に訪れた内田氏の温厚篤実で、誠意に溢れる人柄に魅せられて貸し出しを快諾した、と語られたこと。猛者と思い込んでいた内田氏が、優しく温和な方と知り、愛する2人の令嬢に自らの名前を分割して名付けられたことと併せて、良き父上、夫君であられたことを思って目頭が熱くなった。

▼そしてH氏は、こうも語った。「なぜ銃眼を壊させてくれなかったのか。そうすれば内田さんは死なくて済んだのに……」。無念そうに語る氏の瞳はうるんでいるように見えた。申し出を拒否した表面的な理由としては、上にある民家への送電線を断つ訳にはいかないから、ということだったようだが、短期間の代替措置は色々考えられたはずで、それを追求しなかったのは、指揮官においては、銃眼を潰したくなかった理由があってのことではなかったか……。

▼そもそも鉄球の第一撃は、3階と階下をつなぐ階段脇の外壁に対して行われた。なぜそこだったのか、という理由として

挙げられたのは、3階にいるはずの犯人達と階下に監禁されている人質との交流を断つため。そんな見立ては全く不自然極まりない。私達が階下に赴いたのは日に1～2回。懐中電灯を手に巡視する時のみ。一方、3階のベッドルームには常時ろうそくが灯されていて、その光は雨戸の隙間からも確認できたはず。銃眼を対象としなかった真の理由を隠したいための屁理屈としか思えない。

▼また1人目の被害者である高見繁光警部（特科車輌隊付）は、被弾直前まで特車運転席から内部の偵察に当たっていたことを、私は確認していた（指揮官章からの推認）。私は3階トイレ前の防護畳脇にいて、鉄球で開けられた破壊口を通して運転席は丸見えで、向こうからも内部はよく視認でき、これは公判廷での警察官の証言で明らかとされている。つまり高見氏には、車輌から出て土のう内側に立って内部を伺う必要性は全くなかったのだ。

▼ただ申し上げねばならないのは、お2人が殉職を志願され、警察の威信高揚をめざすS指揮官の切望に応えようとされたとしても、警察官の殺害を、「革命戦争」の実践とみなして正当視し実行に及んだ私達に全面的に非があることは明らかですし、その責任は重大極まりないことも間違いないことで、両氏には心から謝罪し、哀悼の誠を捧げさせて頂くとともに、御遺族の方々にも深く深く謝罪させて頂きたく思います。

▼事件後、北海道警での裏金問題や桶川ストーカー殺人での警察の不手際などが重なり、警察への信頼が低下していく度に思ったのは、泉下の両氏の嘆きで、せっかく身命を賭して築き上げたものが崩されていく無念さです。両氏は殉職者として2階級特進の栄誉を授かったのですが、思うにそれでは到底氏らの功績には報いられていない。叶うことなら、両氏を慰霊するバッジを作り、全警察官がそれを胸に崇高なる職務に日々精励してもらい、不祥事を一掃して、国民全体の奉仕者として貢献して頂ければ、それが両氏への何よりの慰霊となるのでは、との思いを禁じ得ません。

▼指揮官S氏は、先の手記などによって〝英雄〟とみなされ、テレビのバラエティ番組にも出演するなど〝活躍〟されたのですが、参謀の1人だった亀井静香氏は、殉職者の存在を重視され、あの作戦は決して成功とはいえないとの見解を表明されました。氏は、社会を憂えた真摯な若者が悲惨な結末を迎えたのは政治の責任と認じて、以降政治家に転身され、米国からの真の独立―自立という信条の下、死刑廃止というヒューマニズムにも徹されて、活躍されました。秘かに私淑する思いでした。

「撃たないで」と必死に訴えたMさん

▼私が真の英雄だったと思うのは、人質としたM・Y子さんです。Y子さんは、当初は、「私を楯にしないで下さい」と懇願していたのですが、ラジオニュースで警察官の被害者が続出していることを知ると心を痛め、「もう撃たないで下さい。私を楯にしてもよいから、撃たないで」と必死に訴えたのです。そして前日の会合でも、私達が口々に〝闘って最後は死ぬ〟と語ったことに対して、「何でそんなに命を粗末にするんですか」と諭すように語りかけてきました。

▼最終日（2月28日）、私は、持ち場として玄関口や管理人室、調理場を元房氏とともに担当しました。表向きは、その一角が機動隊の突入口となるので防衛するため、ということでしたが、本音としては屋根裏の銃眼担当を避けたかったのです。というのも、前日、銃眼から照明灯を狙撃しようと銃口を向けると、その銃口に木弾らしきものが正確に発射されてきたため、怖れをなし、以降銃眼に近付かなかったのです。

▼調理場の窓に立てかけたベニヤ板の脇から斜めに覗くと、隣りの山荘前の駐車スペースでドラム缶ストーブを囲んで談笑する数名の若い機動隊員の姿が見えて緊張しました。銃を構えると撃てそうです。しかし、ヘルメットも脱いで全く無防備。狙撃すれば間違いなく殺傷し得る状況でしたが、結局、撃てないまま、見なかったことにしてそこを去りました。そちら方面には銃眼も、また覗ける窓も全くないことから、機動隊員の休憩場所となり、また、突入口ともなり、進撃拠点ともなったのです。もし私が、〝任務〟を果たして発砲していたら、警察側は大混乱となり、突入作戦の練り直しも迫られたはずです。

▼当時私は、それを〝日和ってしまった〟〝革命戦士としては失格〟と感じ、のちに〝転向〟を決意したのですが、今思うと、このことによって私は辛うじて人として生きる資格を得たのかもしれない、と考えています。わずかな人間性を喚起してくれたのが、M・Y子さんであり、また両親、そして亡きみちよではなかったか、そう痛感しています。

あさま山荘事件とは何だったのか

この「あさま山荘」事件、そして、「連合赤軍」とは一体何だったのか。

山荘内でただ籠（こも）って、機動隊員に発砲するだけの無意味さを感じて、私はたびたび坂口に献言しました。濃霧に紛れての出撃だったり、トイレの配管パイプを利用しての脱出とゲリラ戦だったり、またMさんの元気な姿を外部に示すことだったり……。その中の一つが、「声明」の発出でした。我々が何のために籠城しているか、その目的と意義をきちんと表明すべきと考えてのことでした。しかし、坂口は拒絶。のちの手記で彼は、声明すべきことを何も見出せなかった、と述懐しています。

それは、提言した私においても同様だったのです。警官を殺傷し、最後は射殺される、それを頭では目指しながら、実際には、逮捕を1日でも延ばす、そのための悪あがきに過ぎなかった、それが真相でした。

考えると、羽田事件で坂口に下された懲役7年の求刑、そこで彼に浮かんだ投獄回避の中国亡命策、それがすべての起点でした。彼の〝親分〟だった川島奪還案がそれに加わり、必要とした銃の入手。捜査の圧倒的強化で奪還案が放棄され、困難を極めた中国亡命も諦め、代わりに山への潜伏。足下固めに寄せ集めたメン

バーの離反が相次ぎ、指導（支配）体制を守るために2名を欺して殺害。他方で銃を求めてきた赤軍派との連携で、組織の瓦解防止を図り、結成されていったのが「連合赤軍」。行ったことは、支配体制維持に妨げとなるメンバーの抹殺。……最後に逮捕を免れようとする悪あがき……かくして、組織・指導部は完膚なきまでの崩壊……。

なぜ、かくも無惨な事態に立ち至ったのか。

国民生活の実態とかけ離れ、その生活実感と全く遊離した「武装闘争」方針にこだわり、「革命」を引き起こさねば、また引き起こし得ると考えた、独善意識に捉われた指導者とその追随者が、社会から孤立し、先細り状態に陥るもなお、その延命に固執した結果ではなかったか、と思えてなりません。

組織関係の14名の被害者の方々は、こうした独善的で傲慢、専制的な指導部に反撥したり、その変革を願い、初心に還って組織の正常化のために尽力しようとして、誤てる「革命戦争」論にもとづく「革命戦士化」（共産主義化）の強要に抗して、主体性・自主性を貫こうとし続けた方々でした。

指導部が、暴力主義行動路線の権化と化して人間性や良心を喪失していった一方、この方々はそれを保持し、かつての新左翼運動や全共闘運動が保有していた正義感や敢闘精神（行動力）や探求心、そして勇気や犠牲的精神を受け継ごうと実践に努めました。

指導者の手下となって、こうした方々の分断支配に手を貸した私に科された贖罪としての責務は、このような精神や志をわがものとするべく努め、17名の方々が果し得なかった社会的、人間的使命を、幾ばくかなりとも継承し果たすべく、生涯にわたって尽力し続け、そうした残生を、御霊前に捧げさせて頂くことではないか、そう心しています。

私に科された贖罪としての責務

具体的に思い描いているのは、

❶「テロ根絶・被害者支援センター」（仮称）をNPO法人として創立し次のような活動をめざす。

(1)暴力主義的な活動路線（テロ的行動）によるすべての被害者・犠牲者の追弔・慰霊のために「合同慰霊碑」を建立する。

(2)毎年「合同慰霊祭」や現地供養を挙行して、追善・供養を怠らない。

(3)広報紙を発刊し、またシンポジウムや討論会、講演会を開催して、テロ的行動の非道性、犯罪性や生命尊重、人間性の涵養（かんよう）の必要性、人権や民主主義の尊重などについて広く訴え続ける。

❷「弱者連合協議会」（仮称）の創設、拡大にも努める。

(1)さまざまな差別や迫害、侮蔑を受け、生きにくさを感じるすべての社会的弱者が、強者の暴力や暴言による犠牲を強いられることなく人間的な生活を送るためには、〝生きようとする力〟をもってつながり合い、結び合って、その連帯する力で、強者の力をハネのけていくしかない。

(2)将来、暴力や力に頼って作られる社会は、結局のところ、強者が支配者となって弱者の上に君臨し、弱者を利用するような体制にしかならない。弱者が弱者のまま、社会や国家の主人公として尊重されるには、弱者の生きる力（生きる闘い）を原動力として、新たな社会・国家を建設していく以外、道はない。

(3)弱者が生きやすい社会は、すべての人々が生きやすい社会であり、誰もが犠牲や迫害を強いられない穏やかで平和な社会。本質的に人はみな弱さを内包し、人と支え合わないと生きていけない弱者だから…。

(4)弱者の連帯は、今生きている場で可能。SNSを駆使して、広く深く浸透し得る。この連帯は、必ずや脱自民、脱野党、脱政党、脱政治……といった傾向を強める多くの人々の共感を得られるはずで、社会、政治を一新する潮流を創っていける…。

私は現在、事件から約52年半。無期刑に服して41年半に達しようとしています。どうやら、「マル特無期」囚となっているようなので、検察庁においては仮釈放不許可対象とされていると思えます。

身は在監中で様々な制約があっても、先のような贖罪としての責務遂行は、部分的には可能と思いますが、心臓に不安を抱える後期高齢者の身としては、十分な活動は望むべくもありません（この手記も、難儀しつつ、思うように書きまとめられず、申し訳ない限りです）。

願わくば、社会に身を移して、残る力を有効に活用し、使命を果しつつこの世を去れれば、と念じています。

それを一番願ってくれているのは、他ならぬ亡きみちよと娘（さちえ）、そして、他の亡き被害者の方々、さらに亡き両親とただ1人の家族となった兄ではないか、と思うのですが、これは独善でしょうか。

多くの方々の御点検、御批評を仰ぎたく思っていますので、何卒よろしくお願い申し上げます。（了）

〈追記〉重要と思える3点についての補足

大事なことを書き漏らしてしまいました。まとまりがなく、読みにくい拙い文章であるにもかかわらず、最後までお読み下さいました読者の方々に、心より厚く御礼申し上げます。

また、構想が定まらず、予定も立たない状況で、長期にわたって、大変貴重な誌面を提供して下さり、諸見解を表明する場を与えて下さった篠田編集長をはじめとする編集部の皆様には、深甚なる感謝の思いを表明させて頂きたい思いで一杯です。

なお、紙幅を考え、割愛させて頂いた事項の中で、やはり重要と思えます3点について、補足として追加させて頂きたいので、何卒、よろしくお願い申し上げます。

(1)まず、私は、なぜ暴力主義的な行動路線（「街頭実力闘争」―「武装闘争」―「革命戦争」）を正当とみなしたのか（その誤りに気付かなかったのはなぜか）。

当時、暴力革命理論を次のように捉えていました。被支配階級が、支配階級の握る政治権力を奪取し、一拠に新たな政治体制・社会体制・経済制度を打ちたてるのが、革命。既得権益を守ろうとする

旧支配勢力は、必死になってこの「革命」を押し潰そうとして、暴力―武力によって激しい弾圧に出る。そのため、自己を守り、革命を推進、成功させるためには、革命勢力側も、組織的な暴力―武力による防衛が必要となる……（議会で多数を占めて政権交代を叶えても、それでは旧体制を根本的に突き崩し変革を成し遂げられない。それをあくまで追求しようとすれば、クーデターなどの暴力で履されてしまう）。

ところが、かつての暴力的な行動は、防衛的なものではなく、極めて攻撃的で、「前衛」（先駆者・先進者）を任ずる傲った〝革命組織〟による突出した戦術として行われた似て非なるものでした。

その結果、〝犯罪的〟な体制内で必死に生きようとする民衆を、反体制意識を抱かない遅れた者で、体制を支えている者とみなし、〝前衛〟に協力・奉仕しようとしない大衆に犠牲を強要することを正当視するに至ったのです。

真岡事件、「さつき山荘―あさま山荘」事件という凶悪犯罪を〝正義〟とみなす錯覚が生じたし、カンパの強要も当然視しました。また、〝孤立〟の自覚がないまま思い上がって、自己中心（独善）の極に達した「指導部」（支配者）による内部メンバーの排除・抹殺さえも敢行されました。

真剣な学習姿勢をもたず、認識力の乏しかった私は、暴力へのコンプレックスもあって、闇雲な自己犠牲心に駆られて、〝冒険〟に挑むような思いで、こうした暴力的行動を推進する組織に身を従え、重大犯罪を犯すに至ってしまいました。誠に忸怩（じくじ）たる思いです。

(2)私が革命左派を唯一の革命組織とみなして、加入し隷従するに至ったのは、なぜか。

革命左派には、2つの面があったように思います。1つは悪しき面で、ロシア革命、中国革命がもつ、突出した軍事行動に依拠して、急激な革命を達成しようとする面（当時、プロレタリア独裁の要（かなめ）は、暴力による支配、と語られていた）。この面からのちに、綱領や政治路線の相違面を無視して、赤軍派と合流・合体化しました。

他方で、対米従属を打破して、真の独立―自立を果たし、より民主主義的な政治体制や社会を建設するために、幅広い階層を結集した「反米愛国統一戦線」を形成して、人民民主主義革命をめざす、という政治路線も掲げていました。

私が、中核派に見切りをつけて、革命左派（当初は青年共産同盟）加入に至ったのは、暴力的な街頭闘争への忌避感を抱く中、後者の、より実現性が高そうで、地道かつ穏健な活動（労働運動など）を主軸としていた面への共感からでした。

ところが「青共」加盟後間もなく、「9・4羽田」のゲリラ行動が任務として示され、その「決死隊」に志願。以後、前者の行動路線を主軸に突き進んだ革命左派指導部に身を隷従させていったのです。進んで、主体的考えを放棄し、自己改造を志向した結果でした。

私が、みちよから「組織をやめて、喫茶店でもやろう」との誘いを受けた際、それを拒絶してしまったのは、体制内で幸せな生活を送ろうとするのは誤り（犯罪的）と思い込んでいたうえに、後者の政治路線を事実上放棄していたにもかかわらず、革命左派の正当性を盲信していたためでした。

ちなみに、森から最初に私に求められた総括課題は「なぜ（反スターリン主義を掲げた）中核派から（スターリン主義）の革命左派に乗り移ったのか」でした。後退した、という見方からの批判でしたが、当時路線問題は全く棚上げされていたため、私がそれに応じられなかったことも殆ど問題とされませんでした。

金子みちよさんと筆者（1968年頃撮影）

みちよの死は私の女性蔑視のためだったのか

(3)私は、みちよをわが子もろともに死に至らせたが、それは私の女性蔑視（差別）のためだったのか。

私は、彼女を、女性としても、また人間としても、とても優れている、私にはもったいないような人として敬愛していました。それにもかかわらず、重大な行動について彼女に相談せずに独断で決行してしまいました。それは危険だったり、大きな犠牲を払うような決断だったので、私を心配してくれる彼女に話せば、反対されることはわかっており、それを相談することは、卑怯なことではないか、との思いがあったためです。

一方、私は男らしくなかった。そういう育て方をされず、生来、おとなしく動きの少ない子だったようです。母も私に、料理など家事を教え込んだり、中・高生頃には母の和服の着付けを教わって手伝ったり、母に付き添ってデパートに買物に行くのが常で、それを別段嫌と思いませんでした。子どもの頃、チャンバラごっこを恐がり、ママごと遊びを好んだりしました。

他方、みちよは女の子っぽくないところがありました。むしろ気丈で、芯が強く、言うべきことをきっぱりと言うなど、しっかり者でした。〝男に比べると、生理がある女は損〟〝私はお嫁さんになるよりお嫁さんが欲しい〟と言ったりしていました。

性愛関係でも、私が受け身になりがちな一方、彼女は男を征服することに快感を感じていたようで、そういう意味で相性はよかったと思います。

ただ危険に遭遇しがちな私を彼女は守ろうとする一方、私は、彼女が危険に直面することをあまり予想せず、「守る」という意識が希薄だったことも、あの場面で、自分を抑制してしまった要因の一つだったのかもしれない、そんな思いが消えません。

……まだまだ書くべきことは山積していますが、それらはまた別の機会にさせて頂きます。

（完）